

気仙沼尾形家（大家）の年中行事

— 尾形栄一 日記を中心に —



川村清志・葉山茂編

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト

「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

「地域における歴史文化研究拠点の構築」ユニット活動成果報告集

気仙沼尾形家（大家）の年中行事

— 尾形栄一日記を中心に —

目次

はじめに	4
小々汐と尾形家	6
国立歴史民俗博物館による文化財レスキュー	10
尾形栄一日記の概要	11
その他の参照資料について	15
表① 一九三二（昭和七）年の年中行事	18
表② 一九三三（昭和八）年の年中行事	18
表③ 小々汐仁屋の年中行事と食制	20
ススハキ	22
町の日	26
年越し	28
正月三ケ日	36
若木迎え	44
七草	45
ノウハダテ	48
小正月	52
オシラ様遊ばせ 寺参り	58
エビス講	60
桃の節句	62
旧の十六日	64
端午の節句	66
天王様	71
七夕	74
お盆	77
お名月（八幡様の祭礼）	87
彼岸の中日	90
お刈り上げ（羽田神社の祭礼）	91
表④ 尾形栄一日記資料一覧	94

●はじめに

このブックレットは、宮城県気仙沼市小々汐^{こじしお}の尾形家住宅を対象に、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）がこれまで行なってきた調査、地域文化の復旧に関する支援活動の成果を報告するものである。

歴博と尾形家との関わりは二〇〇八年までさかのぼる。当時、二〇一三年春の開室をめざして、第四展示室「民俗」の展示を新しくする事業を進めていた。その展示の一つとして計画したのが気仙沼・尾形家住宅の再現模型である。

尾形家住宅は一八一〇（文化七）年に建てられた築二〇〇年の住宅である。当館ではこの住宅を展示することで、家族のプライベート空間としての住宅とは異なる、信仰や年中行事などを通じた公的世界、あるいは精神的世界とつながる場としてのイエを表現しようとした。

この展示に向けた調査が進みつつあった二〇一一年三月一日、東北地方太平洋沖地震をきっかけとして、東北から関東にかけての太平洋沿岸を中心に広い範囲で津波被害が起きた。このとき、尾形家住宅も津波でおよそ一〇〇メートル流れて、屋根だけが残った。この災害を機に、当館の職員が中心となって、尾形家住宅や小々汐集落を対象に、

生活用具や文書などの生活に関わる物質文化を保全することをめざして支援活動に携わった。

二〇一一年一月までに、小々汐の尾形家住宅でおよそ二万点の生活用具・文書を拾った。拾ったものはリアス・アーク美術館、気仙沼市教育委員会、気仙沼市シルバー人材センター会員、大学生ボランティアなど、多くの機関や人びとの支援を受けて、泥やカビなどを落とし塩分を除去するなどのクリーニングを行ない、資料管理用のタグ付けや資料カードづくりなどの資料整理・保管に関する作業を続けている。

これらの作業を通じて、私たちは救ったモノ（生活用具や文書）の所有者であり、尾形家の現当主である尾形健さんやそのご家族、さらには小々汐の人びとのさまざまな語り、記憶に出会い、さまざまな事柄を教えていただくことで、地域の人びとが培ってきた生活文化に対する理解を深めてきた。また作業に携わっていたにいては気仙沼市シルバー人材センターの会員の方々も、折に触れて自らが経験したさまざまな事柄を話してくださいました。

さらに救ったモノとの出会いもあった。二〇一三年三月、当館の新しい民俗展示が開室した。その開室と同時に六ヶ月間の会期で「東日本大震災と気仙沼の生活文化」と銘打っ

た特集展示を開催した。その準備の過程で、救った資料のなかに、尾形家の前当主の弟にあたる尾形栄一氏が残した一九三二（昭和七）年、一九三三（昭和八）年の日記を発見した。この二年間に尾形栄一氏は尋常高等小学校を卒業し、公民学校に進学した。

特集展示で注目したのは、一九三三年三月三日に起きた昭和三陸大津波の記録だった。その後、改めて日記の内容をみなおしてみると、そこには尋常高等小学校から公民学校にかけての栄一少年の目を通して、当時の尾形家というイエの生業、衣食住、年中行事などが事細かに記述され、また尾形家と関わる人びとの往来なども記録されていた。

こうした日記の読解を通してわかってきたことと支援活動を通じて我々が聞き取った事柄とを結びつけ、体系的にみえる形にしておこうというのがこのブックレットのねらいである。これまで小々汐については、竹内利美ら（一九五九年）や気仙沼市教育委員会・東北大学教育学部（一九五六年）、東北歴史資料館（現・東北歴史博物館、一九八四年）、川島秀一（二〇一四年）などによる多くの調査があり、報告書が刊行されている。こうした先行研究の成果を踏まえ、このブックレットでは一九三三年の昭和三陸津波や二〇一一年の東北地方太平洋沖地震にともなう

津波災害のあとの尾形家の儀礼なども視野に入れ、小々汐オオイ（大家Ⅱ小々汐の総本家）である尾形家の生活がどう変化したのかを整理する。この巻では、とりわけ尾形家の年中行事に注目して、生活の有り様とその変容を描く。

このブックレットをつくるにあたっては多くの人びとの協力を得た。私たちのあつかましいお願いを聞き入れ、生活用具の救援活動と調査をお許しいただき、聞き取り調査にも応じてくださった尾形健さん、尾形民子さん、尾形健浩さん、快く写真を提供して下さり監修も引き受けてくださった東北大学教授の川島秀一先生、また写真を提供してくださったリアス・アーク美術館学芸員の萱岡雅光氏、そして歴博の職員が持ち込んだ生活用具や民具をクリーニングする枠組みをつくり救援活動のチームを組織してくださった気仙沼市教育委員会、および同委員会の幡野寛治氏、活動当初の作業場所を提供してくださったリアス・アーク美術館、内海孝志氏・佐々木和弘氏・庄司さだ子氏・橋本和子氏（五十音順）ほか気仙沼市シルバー人材センター会員で作業に携わってくださった方々、その他多くの方のお世話になった。記して御礼を申し上げます。

二〇一七年三月

東北地方の太平洋岸は、複雑に入り組んだリアス式海岸が続く。そのリアス式海岸の一角に、宮城県気仙沼市がある。気仙沼市は宮城県の最北部に位置し、およそ六万六〇〇〇人の市である（二〇一七年三月現在）。気仙沼湾の奥部には、天然の風待ち港として栄えてきた気仙沼港がある。気仙沼はこの港を中心に発展してきた。現在、気仙沼港はカツオやマグロの遠洋漁業の基地である。

この気仙沼港の向い、気仙沼湾の東岸に小々汐集落がある（地図1）。気仙沼の市街地から小々汐に行くには、現在では一度、鹿折地区（シホリ）まで北上して浪板橋（なみいた）を渡り、浪板大浦と約三キロの道を南下する。しかし気仙沼湾を渡る便船がさかんだった頃には、一キロメートルほどの移動で町に行けた。

氣仙沼湾の東岸は、鹿折の平地を過ぎて南に下がる浪板、大浦、小々汐、かじがうら 梶ヶ浦と、つるがうら 鶴ヶ浦と、山際と谷に沿つて各集落が点在する。そのうちの浪板を除く集落は四ヶ浜しかはまと総称される。四ヶ浜は鹿折川の川上に位置する鹿折八幡神社の祭礼園であり、浦島小学校の通学圏でもある。

四ヶ浜の一つ、小々汐も小さな谷の平場を中心とした集



0 500m

落である。二〇一〇年の小々汐は五四戸、一四〇名ほどの集落だった。この地区の世帯は大半が同族であるとされ、尾形姓を名のっている。地域内の各家々は、屋号で呼び合っている。その集落の総本家が、オオイと呼ばれる尾形家である。尾形家は日々の暮らしや年中行事で地域の中心的な役割を担ってきた。



地図1 気仙沼のなかの小々汐

藩政時代中期、四ヶ浜を中心にイワシ網漁がはじまり、カキ養殖がさかんになる昭和初期まで続いた。尾形家はこのイワシ網漁で発展した。

この地域のイワシ網漁の発展は、二つの経済的要因に支えられた。ひとつはカツオ一本釣り漁のエサ需要であり、もうひとつは当時の農作業の肥料需要である。カツオ一本釣り漁は大量の生きたイワシをエサとした。また農作業は肥料としてしめかすべ粕を必要とし、その原料がイワシだった。べ粕は気仙沼の間屋を通して江戸に送られる商品だった。

7

ら鮎立の古館家に伝わった「気仙沼市史編さん委員会一九九七」。気仙沼でカツオ漁がさかんになると、漁のエサとしてイワシが必要となり、四ヶ浜のイワシ網漁がその需要を満たすが、必要とされるのは夏の一時期だけだった「川島 二〇一二」。

イワシ網漁には夏網と冬網があり、それぞれ権利が必要だった。夏網はカツオ一本釣り漁のエサに使うイワシ、冬網はべ粕に加工するイワシをとった。尾形家は夏冬両方の権利をもち、一年を通してイワシをとって生計を立ててきた「気仙沼市史編さん委員会 一九九七」。

言い伝えによると、尾形家はイワシ網漁で成功して住居を高台のタクバから小々汐の谷に移したという（地図2）。谷に移った時期は定かではないが、尾形家は一八一〇（文化七）年に小々汐の谷に家を建てた。それが東北地方太平洋沖地震で被災するまで約二〇〇年、海の端にあった尾形家住宅である。

(2) 地域の政治的中心としての尾形家

藩政時代、尾形家は肝入という役職についていた。肝入は一般的には庄屋や名主にあたる役職である。地域の人びとから租税を徴収するほか、戸籍の整理や地域で工事をするときの人夫の手配、人びとの請願を藩に伝える役割を担

い、仙台藩と地域の人びとをつないでいた。肝入は当初、代官が直接に村の有力者を指名したが、のちにはムラの寄り合いで決まるようになった「気仙沼市史編さん委員会一九九〇」。しかし選出方法が変わっても、経済的な中心であった尾形家は肝入の役職を期待された。

明治時代になると、地域の代表は選挙で選ぶものになった。尾形家はそこでも地域の政治的中心であることを求められた。そこで尾形家から政治家が誕生した。

尾形家の先々代当主であった尾形貞七氏は、小々汐を含む地域にあった鹿折村の村議会議員を歴任し、一九〇五明治三八）年から一九〇七（明治四〇）年と一九一七（大正六）年から一九一八（大正七）年にかけて村長になった。村長の在任中は小々汐の自宅が村役場となり、多くの人びとが入り出した。政治家になることは、家に多くの客が訪れる機会が増えることだった。

(3) 文化の結節点としての尾形家

生業活動や政治の上で重要な任を担っていた尾形家には多くの人びとが入りし、そこに集落内外の人びとを巻き込んだ生活文化が形づくられた。

尾形家には大量の神札が残っており、大きな神棚に神仏を祀り、オシラ様も信仰してきた。神札はイエの人びとだ

けでなく、尾形家に来る人びとが持ち込んだものも多い。尾形家の神札には、気仙沼市唐桑の御崎（日高見）神社や気仙沼市松岩の松岩寺などの地元の神社に混じって、日本海側の山形県遊佐町にある鳥海山大物忌神社や岩手県紫波町にある紫波稲荷神社、同県陸前高田市にある氷上神社、宮城県大崎市にある斗瑩稲荷神社などの名前を確認できる。これらの神札は、尾形家に関わる人びとの信仰圏を表わしており、人びとの出入りの記録ともなっている。

また神棚やオシラ様もイエの人びとだけが信仰するものではなく、地域の人びとが年中行事を通じて信仰してきた。尾形家は多くの年中行事を執り行ってきたが、それらの年中行事は集落の人びとが参加して成り立つものも多かった。のちに詳しく述べるが、年末のススハキや年始に執り行うノウハダテなどには、イチシンルイ(1)と呼ばれる尾形家と関係の深い人びとが参加していた。

経済や政治の中心であることは、金銭や権力の問題だけではなく、地域の内外の人びとの結節点になることだった。尾形家は経済の中心であり、かつ政治の中心であるからこそ、結節点としての役割を期待され、そこに人と人が交流することで生まれる生活文化が育まれてきたのである。

(1) 小々汐集落に住む人びとをオオイである尾形家は、ゴシンルイ（御親類）と呼び、家で冠婚葬祭などがあるときには声をかける。そのなかでもとくに関係が深い家をイチシンルイ（親類）と呼び、生業活動や年中行事などを通じて密接な付き合いをしてきた。栄一氏が日記を書いた時代には、イチシンルイは小々汐内の六軒の家だったと考えられる。現在では一〇軒の家がイチシンルイに位置付けられている。イチシンルイの範囲については、時代によって大きく変わっていることが予想される。

《参考文献》

川島秀一

二〇一二『津波の町に生きて』富山房インターナショナル

気仙沼市史編さん委員会編

一九九七『気仙沼市史V産業編（下）』宮城県気仙沼市長 小野寺信雄

●国立歴史民俗博物館による

文化財レスキュー

はじめに述べたように、歴博と小々汐・尾形家との関わりは二〇〇八年にさかのぼる。総合展示第四室「民俗」の更新作業を進めていた当館は、日本の祭祀・儀礼の空間としての民家を展示室に再現する計画を立てた。その対象として小々汐・尾形家住宅を選んだ。お盆とお正月を中心に各二度調査し、年中行事のやり方や年中行事のなかで用いる行事食などを記録した。そして再現模型製作のための採寸や各月の年中行事の調査を始めようとした矢先の二〇一一年の三月、尾形家住宅は津波で流され倒壊した。被災から一ヶ月が経たない四月はじめ、私たちは尾形家住宅の再現模型をつくる計画を進める是非を判断するため気仙沼を訪れ、所有者の尾形さんと話し合っ展示の製作と公開をめざすことを決めた。そこで生活を伝える生活用具や文書を残し、建材を拾って調査をする目的で、被災現場での作業がはじまった。

作業をはじめてみると、母屋にあったものは屋根の下にそのまま残っていることがわかった一方、蔵や長屋門などにあったものは谷中に散乱したことがわかった。それらを

その年の十一月までかけて拾った。拾ったモノは建材や破片も含めて総計一九・五〇〇点あまりにのぼった。

拾ったモノは当初、リアス・アーク美術館に運び込んで館内の資料に影響しない場所で保管していたが、気温が高くなるにつれて劣化が目立つようになり、国立民族学博物館の日高真吾氏のチームに指導を仰いで、カビやほこり、塩分などを落とすクリーニング作業をはじめた。同年一月に美術館が再オープンの準備を進めた時点で、作業場を気仙沼市内の旧月立中学校に移動した。その後、現在に至るまで旧月立中学校校舎にて、資料の整理や修復、管理の作業を続けている。

これらの作業の中心となったのは、気仙沼市シルバー人材センターに登録する一般市民の方々である。ほとんどの方は博物館に勤めた経験もなかったが、これまでの生活のなかで培った経験を活かして、さまざまな知恵を出しあって作業を進めてくださった。実際、歴博の職員は役割としては指導する立場だったが、作業を通じてモノの特性や資料整理の方法などについてさまざまなことを教わった。また私たちが興味を持ちそうな箇所印をつけておいてくださったことも多々あった。そうやって整理された資料の一つが、今回紹介する「尾形栄一日記」である。

●尾形栄一日記の概要

尾形栄一氏の日記は、生活用具・文書の救援活動が終ってから、約六ヶ月後の二〇一二年春に見つかった。見つかったのは、救った資料を全て市内にある旧月立中学校校舎に運び、資料整理をしていた時期である。この日記には個人的な生活の様子

様子が記されている

ため、ほかの資料の記録化作業と切り離し、歴博の職員が内容の確認と保存方法を検討した。

この日記は、現当主、尾形健氏のオジ（父）に記したものである。栄一氏は、健氏の父、忠行氏の



1932（昭和7）年日記表紙
OEI32-0

弟にあたる。忠行氏、栄一氏たちの父、良蔵氏は不惑を待たずして早逝している。日記が記された当時は、栄一氏たちの母親が忙しく働いていた様子が確認できる。

日記は高等小学校の最終年度にあたる一九三二（昭和七）年度とその翌年の生活を、ほぼ毎日記録している。横長の藁半紙の帳面に記されており、特に決まった形式はない。右開きの帳面に新暦の月日順に記されている。一九三二年度は一六七頁にわたって日記が記され、最終頁に所在が記されている。一九三三年度は、一二五頁に記載がある。この日記には当時一〇代半ばだった栄一氏が経験した尾形家の生業や年中行事、人生儀礼や民俗信仰、さらにそれらの様々な営みに関わる家族や親族たちの様子が簡潔に記録されている。

はじめにでも記したように、この日記に注目したきっかけは、国立歴史民俗博物館が二〇一三年三月から九月にかけて総合展示第四室の副室で開催した特集展示『東日本大震災と気仙沼の生活文化』にともなう資料調査であった。日記には一九三三（昭和八）年にこの地を襲った昭和三陸大津波の様子が克明に記されていた。

もっとも、震災と津波の記録の克明さに比して、通常の日記の記述は非常に簡潔である。一見したところ、義務的

に日々の天気や起床と就寝時間、一日の勉強や仕事とそこに関わった人びとの名前が羅列されているようにみえる。しかし日記の端々からは、当時の尾形家が従事していた生業の様子や行事の姿を多角的に読みとることができる。それらの日記の記述を整理し、まとめていくことで、民俗誌的にもきわめて重要な資料が記されていることがわかってきた。それらをいくつかの項目に分けて説明する。



1933 (昭和8)年日記表紙
OEI33-0

(1) 生業

日記には生業のカテゴリーとして漁業と農業についての記述が目立つ。まず漁業では、栄一氏が主に関わった作業として、海苔養殖とイワシ漁

ともなう、粕作りの作業が繰り返し記録されている。また、海苔とともに牡蠣も養殖していたことが窺われる。これらの作業の多くは、小々汐の同族との共同作業を前提としており、どのような立場の人がどのような作業に従事していたのかを検証する糸口になるだろう。

もう一つ興味深いのは、現金収入とは直結しない海での活動が、幾度も記されている点である。それらは主に栄一氏本人とその兄弟たち、時には祖母や妹も交えて行なわれ、自家消費の側面が強い。その意味ではマイナー・サブシステンスとしての漁や採集活動と言えそうである。具体的にはアサリやサラ貝といった貝類、タコやボラ、オオガイ（ウガイ）の釣り漁などが記録されている。

栄一氏は漁業とともに農作業についても、定期的に記している。当時、尾形家は小々汐内だけでなく、地区の対岸の気仙沼市田中前や神山周辺の土地で水田をつくっていた。田中前はもちろん、神山、崎山などの地名が繰り返し出てくる。これらの田仕事、とりわけ田植えや稲刈りなどの作業でも、多くの親族が作業に参加している。同じような共同作業は、麦の刈り入れや豆の収穫でもみられる。この他、大根、豆類、ジュウネン（エゴマ）、カライモ（ジャガイモ）などの畑仕事の様子も確認できる。

(2) 家族・親族

これらの生業と密接に関連して登場するのが、家族・親族や地縁関係のつながりである。日記には、生業や家業の「手伝い」にくる地縁、血縁に連なる人びとが頻繁に登場する。すでに記したようにオオイには、小々汐のなかでもイチシンルイと位置付けられる家が存在する。それらの家は、生業の手伝いはもちろん、季節の節目に行われる年中行事や衣食住でもオオイと密接なつながりを持っていた。仕事の種類によって「〴〵のオドヤ（父）」や「〴〵のオガヤ（母）」のようにジェンダーごとの差異も記されることが多い。

(3) 衣食住

衣食住のなかでもっとも記録されているのは、「食」の分野である。なかでも頻繁に登場するのは、様々な儀礼食



後年の尾形栄一氏
(尾形栄樹氏提供)

に用いられる餅である。その他にもトコロや小麦粉を焦がしたコウセンなど、季節ごとに特徴的な食事が記されている。「住」の数は多くはないが、年末や来客に対応した掃除の際にオクやデイといった部屋の名称が記される。また、庭や蔵などを含めた労働作業の場所についても記録されている。日常的な衣料については、改めて言及されることは少ない。それでも、街で購入してきた帽子や靴については記録されている。また、昭和と大津波の際にも、自らの衣装についての記述を確認することができる。

(4) 年中行事

年中行事は、この日記のなかで頻繁に記述される。とりわけ、正月と盆前後の行事が集中する時期には、簡潔ではあるが、様々な行事が執行されていたことがわかる。また、桃の節句や端午の節句、あるいは七夕についての記述もみられる。その具体的な内容については、本稿において、随時、紹介していくことにしたい。

(5) 人生儀礼

ライフコースの節目に行なわれる人生儀礼についても、日記に記されている。とりわけ関心をひくのは、一九三二年の祖父貞七氏の臨終から葬儀、さらに四十九日までの行事が、記録されている箇所である。また、尾形家の親族の

婚姻に関する記録もみられる。さらに出産の記事さえ記されている。

いわゆる冠婚葬祭は、年中行事に比して特別な出来事と意識されることが多い。けれども、二年間という限定された期間にもかかわらず、地縁・血縁のネットワークの広がりのおかげで、毎年のように何らかの人生儀礼が発生していることが理解できるのである。

(6) 民俗信仰

民俗信仰もまた、家族・親族や年中行事と密接に結びついており、日記の端々にこのカテゴリーにあたる記述がみられる。日記のなかには、一家のほぼ全員、あるいは家族の一部が檀家寺に参った記事やエピソード、あるいは金比羅様、天王様、明神様など、小々汐地区でお祀りしている様々な小祠に対する信仰の様子が記されている。また、家の神であり、おそらくは集落の神でもあったオシラ様についての言及もあり、口寄せと思われる記述も残されている。残念な点は、他の行事や儀礼と同様に各々の信仰の内容に踏みこんだ記述は、あまりみられないことである。

このように「日記」には民俗学がテーマとするエピソードが数多く見られる。これらをピックアップするだけでも、十分に興味深い資料を得ることができただろう。ただし、

●その他の参照資料について

本報告は、これまで述べてきた「尾形栄一日記」を中心にオオイの年中行事を紹介する。そこから昭和初年の年中行事のアクチュアルな位相を明らかにすることが、基本的な目的である。そのうえで本報告では、オオイにおける年中行事の時系列的な変化の過程を、いくつかの文献資料と聞き取りによる資料を通じて整理することになる。

戦後の資料としては、一九五〇年代の終わりに竹内利美が行った漁村調査の報告書『漁村と新生活―気仙沼湾地区基礎調査―』がある（資料①）。この報告書は、小々汐を含めた四ヶ浜漁村の社会形態を報告している。地域におけるオオイの存在の重要性に注目しており、その社会的役割や年中行事、宗教儀礼についても紹介している。それらの報告は、あまり詳細とはいえないが、他地域との比較の上では参考になる記述が多い。

次に『三陸沿岸の漁業と漁業習俗』のなかの「宮城県気仙沼市四ヶ浜」の章にも、小々汐をはじめとする四ヶ浜の漁業と生活習俗についての記載がある。この報告書は、生業を中心に記録しているが、幾つかの記述には、小々汐の年中行事に関連する記述もみられるため、適宜、参照す

日記に記された内容は、このような記述にとどまらない。オーソドックスな民俗学のカテゴリーに加えて、近代以後に新たにもたらされた生活環境や社会的な制度についての記述も見ることができる。

その一つは、栄一氏が通う学校での生活、すなわち「近代教育」に関連する記述である。当時の子供たちにとって学校生活は、家や地域における他の様々な活動とも密接に結びついていた。栄一氏が盛んにとりあげるスポーツ（野球、ドッチボール、ピンポン、バレーなど）は、学校教育のなかで体得されたものである。また、季節の節目で行われる運動会や学芸会は、学校行事に留まらず、父兄を含めた村や地域の催し、言い換えれば新たな年中行事として定着しつつあった。

この他にも徴兵や教練などの文脈で登場する「軍隊」に関わる記載、蓄音機や映画といった新たなメディアの存在、汽車や自動車などの交通手段の発達など、日記の中には、当時の地域社会の変容がリアルタイムで記されている。

このように昭和初年の小々汐を取り巻く地域社会の状況を伝える貴重な資料として、この「尾形栄一日記」は、多面的な検証が行われるべきである。

ことにしたい（資料②）。同様に一九九四（平成六）年に発刊された気仙沼市史の民俗編についても、他地域との比較事例の際には、随時、参照していく（資料③）。

最後に二〇一四年に刊行されたオオイの第一別家（分家）の仁屋の年中行事とそこで撮影された当時の画像資料を参照する（資料④）。そこで紹介する資料の多くは、一九八〇年代から九〇年代のはじめに市史の著者の一人である川島秀一が収集した事例報告である。この報告書は、仁屋の事例が中心となるが、季節の節目となる行事では、しばしば仁屋の当主がオオイに赴いて行事を手伝ったり、指導したりしている。それらの事例は、この時期のオオイの行事を知る貴重な資料にもなっている。この記述や画像資料に端を発しながら、川島本人からも、いくつかの補足事例を聞くことができた。なおこのほかに、震災前後のモノグラフとして、小池淳一の年中行事の報告、梅屋潔を中心とする気仙沼の無形文化財に関する調査報告も適宜、参照している「相沢他 二〇一三、梅屋 二〇一四」。

また、震災以前に行われた聞き取り調査の報告も行われている「小池 二〇一三」。この報告と合わせて、震災以後に編者たちが行ったインタビューによる資料についても紹介していく。

本報告の構成と解題において気を配ったのは、資料の時系列とそれらを再統合する編集者の視点の差異である。すなわち、複数の資料の記述や調査者の視点を混同させたり、時系列を乱した解釈の挿入を行ったりしないように気を配った。

時系列的に事例を配していくと、どうしても過去の事例を現在の視点から再構成しがちになる。そのため、あたかも現状の視点を全一的なものとして解釈することが多くなる。もちろん、このような解釈の視点を完全に排除することは不可能である。複数の視点から編集が行われたとしても、資料の選択やブックレット上での配置、資料紹介のアクセントの置き方などで、編者の視点や解釈は含みこまざるを得ない。

そのような入れ子状の解釈は避けられないにせよ、その枠組みがなるべく判別できるように資料を配列することを目指した。そのため、各々の時代の資料から客体化される情報には、できるだけ事後的な解釈や説明を付加しないように心がけた。一つの行事についての記述が断片的であっても、それらの情報の形態と内容を重視しながら解題を行っていった。煩雑な記述になった部分もあるが、これらは各々の資料の様相を重視した編集の結果である。

んが」と言う表現が、遊びの場面に登場することがある。これはは桶を固定する「タガ」のことであった。タガを回す遊びが当時から、近年に到るまで行われていたことが、他の資料や聞き取りによってわかっている。

このような様々な事例をどのように記述していくのか、あるいはすでに記述されたものをどのように平準化していくのかを考える一助としても、このブックレットを活用していきたいと考えている。

《参考文献》

相沢卓郎・齋藤良治・土取俊輝・梅屋潔

二〇一三「気仙沼市における無形民俗文化財の調査記録(1)『地域構想学研究教育報告』四、二二—四〇頁。

梅屋潔

二〇一四「その年も、「お年とり」は行われた——気仙沼市鹿折地区浪板および小々汐の年越し行事にみる「折り」『無形文化が被災すること——東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』新泉社、一六—二八頁。

川島秀一

二〇一四『小々汐仁屋の年中行事』東北芸術工科大学

ただ、最も古い日記資料の解題の段階で、あらかじめ付与した情報がいくつかある。まず、同時代の言語的な情報の補完である。日記中の行事やその内実についての言葉が、主に音韻的に今日の記述とズレがある場合、それらを共通の事例、ないしは範疇として同定する必要があった。例えば、日記で登場する「モドツ」や「ウシヌグイ」は、現在では、「モトヅ」、「オシノグイ」と表記されていることを紹介している。日記に登場するものが文字だけの場合、あるいは特定の行為しか記録していない場合は、その形式に連続性が見られると判断できる範囲内で補足的な説明も行なっている。

また、当時の社会的、地理的な情報についてもこの段階で補足している。地理的な情報として、地名や地名によって資料上で意味される家名や人名を付与している。さらに日記の読解のなかで明らかになった意味の不明瞭な言葉についても、注解を記すことにした。その多くは、日記の著者にとつては常識として省略されたり、独特の言い回しで表記されたりする言葉である。例えば「少俱」あるいは「小ク」という表現が日記には登場する。前後の文脈や日記の他の箇所の表現から、当時、子供達に人気であった娯楽雑誌、『少年倶楽部』であることがわかった。あるいは、「た

東北文化研究センター(資料④)。

気仙沼市市史編さん委員会編

一九九四『気仙沼市史Ⅶ 民俗・宗教編』気仙沼市市史編さん委員会(資料③)。

小池淳一

二〇一三「東日本大震災と文化資源——気仙沼市小々汐地区から——『国立歴史民俗博物館研究報告』一八三、一六九—一八六頁。

竹内利美

一九五九『漁村と新生活——気仙沼湾地区基礎調査——』気仙沼市教育委員会(資料①)。

東北歴史資料館編

一九八四『三陸沿岸の漁業と漁業習俗 東北歴史資料館史料集 一〇』(資料②)。

表① 一九三二（昭和七）年の年中行事

旧暦	新暦	日記に記された行事
11.11	2.7	○元旦
1.2	2.6	○おひき
		○七草粥
		○ノウハダテ
1.11	2.15	○小正月 アワボヘイボ お明神様のお松 庚申 歌い込み
1.16	2.21	○おしら様拌み
2.1	2.25	○エビス講
2.2	3.10	演芸会 陸軍記念日
3.3	4.8	○旧の三月三日 大漁祭 じおどり 桃の節句
3.3	4.21	○十六日まんじゅう
4.4	5.2	田の二八日
5.5	6.6	○おたのかみ（食） ○端午の節句の準備 菖蒲湯 ○端午の節句 神様あそびせ おさなぶり 小田の神様 八幡様 お十八夜Ⅱモチ

表② 一九三三（昭和八）年の年中行事

旧暦	新暦	日記に記された行事名
1.11	2.7	○元旦 オシノグイ おかざり 寺参り
1.1	2.6	○年始
1.1	2.4	○若木むかえ
1.1	2.3	正月 年始（まわる）
1.1	2.5	○お参り（お天王様）
1.1	2.7	ノウハダテ（準備）
1.1	2.10	○ノウハダテ
1.1	2.11	アワボヘイボ
1.1	2.12	小正月 ナマコドリ 歌い込み 学芸会
2.1	2.16	○お寺参り
2.1	2.17	○紀元節
2.1	2.18	○エビス講
3.1	3.10	年始
3.3	4.8	神武天皇祭 ○十六日まんじゅう
4.4	5.2	天長節
5.5	6.6	○端午の節句 ○端午の節句

12.12 29.28	12.12 16.15	12.12 15.9	12.12 9	10.6 6	9.9 29.16	9.9 9	9.9 9	8.8 23.17	8.8 17.15	8.8 15.17	7.7 16.15	7.7 14.13	7.7 7.6	7.7 6.5	6.14 14
2.2 5.4	2.2 4.23	1.1 22.2	1.1 16	11.3 3	10.10 28.15	10.10 8	10.10 10	9.9 23.17	9.9 17.15	9.9 15.17	8.8 17.16	8.8 15.14	8.8 8.7	8.8 6.7	7.17 17
○年越し	○二八日 町の日	○ススハキ	○ススハキの準備	明治節	○旧の二九日（お刈り上げ）	運動会（鹿折小学校） ○十六日マンジュウ	運動会（お名月（十五夜）） ○彼岸の中日	○八幡様の祭礼 運動会	○八幡様の祭礼 運動会	○八幡様の祭礼 運動会	○盆船流	○墓参り	○セナカデバットウ	○七夕の準備 ○七夕の飾り付け ○七夕流し 墓、家周りの清掃 ○旧の十三日 町の日 お盆 盆棚	○お天王お参り

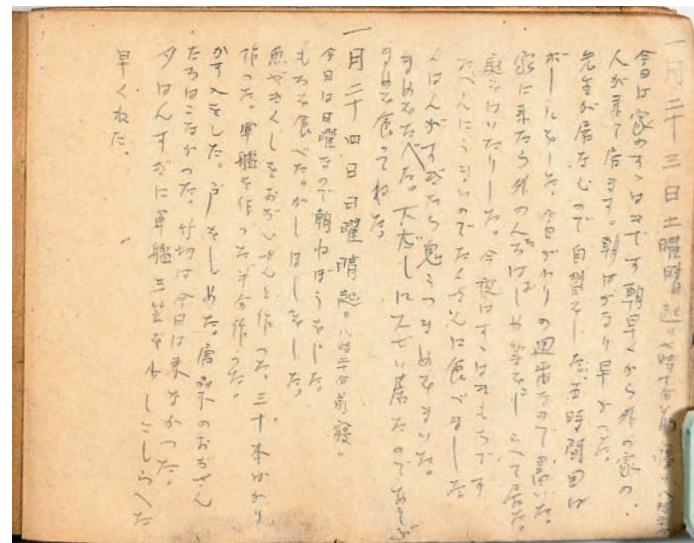
表③ 小々汐仁屋の年中行事と食制

月		行事名		朝食		昼食		夕食		備考	
1	日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
三ガ日		餅（お雑煮）		ソバ		トロ口飯					
五かん日		御飯		御飯・アズキ		御飯・アズキ		アサバミ（朝食）にアベカワ餅			
七草		御飯		御飯・アズキ		御飯・アズキ		アズキ粥のこと			
農ハダデ		餅（お雑煮）		御飯・アズキ		御飯・アズキ		アズキ粥のこと			
女の年越し		松納め粥		御飯・アズキ		御飯・アズキ		アズキ粥のこと			
小正月		（魚の禁忌）		御飯・アズキ		御飯・アズキ		アズキ粥のこと			
ヤイドの正月		ヤイド粥		御飯・アズキ		御飯・アズキ		アズキ粥のこと			
ツタコ正月		御飯		御飯・アズキ		御飯・アズキ					
旦那のダラヒキ		御飯		御飯・アズキ		御飯・アズキ					
ご節句		染め餅（蓬餅）		（魚の禁忌）		アズキの饅頭（魚の禁忌）					
農ツラ様		農ツラ団子									
彼岸の入り		ボダ餅									
彼岸の中日		餅（魚の禁忌）									
お薬師様				田打ち餅		一升餅・五升酒					
○田打ち		柏餅				シヨウブ酒					
ご節句											
シラス網結い				アズキ粥・ハットウ		休憩に甘カユ（甘酒のこと）					
お田植え				オダノカミ							
お十八夜				春コウセン		麦御飯		歯がため餅			
六月ヒトエ				麦オママ・甘カユ				休憩に赤飯			
○麦打ち											

（●は生業に関する行事・○は本家へ行って行なう行事）

12			11			10			9			8			7					
31	2010	8 1	24	15	11	20	29			18 16	15	1	16			15	13	7		
カッパライの朔日 権現様の年越 お大黒様 煤掃き 冬至 お年越し			厄神除け 油しめ オダイシ様			エビス講			庭払い お刈り上げ 彼岸の入り 彼岸の中日			農ツラ様			八朔の一日 お名月様			七ツ 盆迎え お盆 送り盆		
									ボタ餅 餅（魚の禁忌）			農ツラ団子 （魚の禁忌）						赤飯（魚の禁忌） セナカデバットウ （魚の禁忌）		
お粥																				
御飯 カボチャ粥 オオギリ餅・豆 ケンチンダンス 餅（アンコ餅）			ヒトカタケ餅（亥の子餅） 油しめ団子（ケンチン団子） アズキ粥・団子（果報団子）			ボタ餅 ドンコ汁			餅（クルミ餅） 餅（ボタ餅）			餅（アンコ餅） 餅（豆・栗・焼米）			御飯・ボタ餅			お赤飯・団子 （魚の禁忌）		
休憩にザッコ（煮干し）を燗して食べる									ズンダ餅			アズキの饅頭						盆棚をかく前に魚 ムルクシ団子（モロコシ団子か）		

● ススハキ

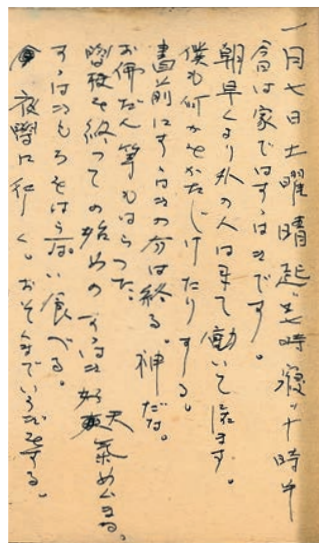
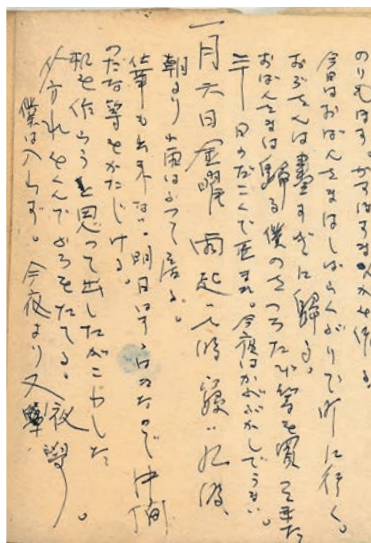


OEI32-06

旧暦 1931年 12月 16日
新暦 1932年 1月 23日

一月二十三日 土曜 晴 起 七時十分前 寝 八時二十分
今日は家のすゝはき⁽¹⁾です朝早くから外の家の人が来て居ます。朝はかなり早かった。先生が居ないので自習をした。五時間目はボールをした。今日がかりの週番なので書いた。家に来たら外の人たちはおしめ⁽²⁾等をこしらへて居た。庭をはいたりした。今夜はすゝはきもち⁽³⁾ですたいへんにうまいのでたくさんに食べました。夕はんがすぎたら鬼うつまめ⁽⁴⁾をまいた。まめをたべた。大だし⁽⁵⁾に大ぜい居たのであそぶまめを食ってねた。

(1) 煤掃き。イチシシルイと呼ばれる親族が集まってオオイの大掃除を行う。(2) 正月に飾る注連縄をさす。(3) すずはき餅。(4) 鬼うつまめ、これらの係も別家ごとに決まっていた。(5) 小々汐の地名で、オオイの家の向かいの広場から海岸部周辺を指していた。



OEI33-02

旧暦 1932年 12月 11,12日
新暦 1933年 1月 6,7日

一月六日 金曜 雨 起 七時 寝 九時

朝より小雨はふって居る。

仕事も出来ない。明日はすゝはきなので中間⁽¹⁾のたな等をかたじける。

机を作ろうと思つて出したがこわした。

夕方水をくんでふろをたてる。

僕は入らず。今夜より又×夜學。

一月七日 土曜 晴 起 七時 寝 十時半

今日は家ではすゝはきです。

朝早くより外の人に来て働いて居ます。

僕も何かをかたじけたりする。

晝前にすゝはきの分は終る。神だな。

お佛だん等もはらつた。

學校を終つてのはじめのすゝはき天氣にめぐまる。

すゝもちをはら一ぱい食べる。

× 夜學に行く。おそくまでいづぎをする。

(1) 神棚のある部屋。仏壇のある部屋はオカミと呼ばれる。



右 ススハキに用いるワラウチ石
1988.12 撮影 川島秀一
上 ススハキの作業
1988.12 撮影 川島秀一
このワラウチ石は津波によって行方不明となったが、約1年後に発見されることになる。

《日記解題》

ススハキは平たく言えばオオイの大掃除である。この日は、オオイのイチシンルイと呼ばれる近所の者たちが集まってくる。彼らの作業を始める前の日に、あらかじめ掃除が行われていたことがわかる。栄一氏は、彼らのことを「外の家の人」と表現している。彼らは、このような儀礼的な場だけでなく、農業や漁業などの日常的な労働の場にも頻繁に登場する。

日記に記されている彼らの作業として、まず、「おしめなどをこしら」えていたとされる。これは、注連縄しめなわのことを指している。もちろん、掃除も行われた。三三年の記述では、神棚や仏壇などの掃除が行われたことも記されている。むしろ、新年を前に神仏に関わる場所を清浄にすることが、ススハキの重要な目的の一つとも考えられる。

夜になると「すゝはきもち」を食べたとある。名前がついているように、この日はモチをつき、食べることが決まっていた。夕食後には、「鬼打つ豆」がまかれた。この行事は、他地域の節分に行われる行事と内容的には変わらない。

《資料》

資料①では「煤払」、資料②では「ススハライ」と表記

される。「特定の六軒の分家から男女各一名が参集。男はススハライ、女は台所の清掃に当る。終了して『一別家』のものが豆まきをする」とある。この記述にある「一別家」は、後にのべる仁屋にんやのことである。

資料③、④では、「煤掃き」と表記される。資料④によると仁屋でも、自分の家で使う注連縄を自分でなっていた。ただしワラを打つ時に、樁の木でできた槌を使ってはならないとされていた。もし樁で打つとテンテンコブシという妖怪が訪れてくるとされた。

仁屋の豆まきも、ススハキの夜に行われた。オガミから



上 ススハキの際、囲炉裏で豆殻を燃やす
1986.12 撮影 川島秀一
下 豆まきの豆を炒る
1986.12 撮影 川島秀一
この豆をまくのは仁屋の当主の係であった。

外へ向かって、「天打ち、地打ち、四方打ち、鬼は外、福は内、鬼の目玉ぶつ潰せ」と三回唱えながら豆をまく。その後、マスに入った豆を、一人ひとり手づかみで食べるが、その時に年の数より一つ多い数に当たると、縁起が良いとされた。

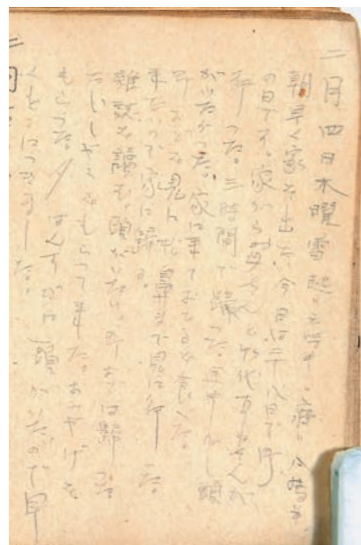
《聞き取り》

注連縄を作る際には、炉辺のそばの土間に埋まっているワラウチ石を用いた。この石にワラを置き、叩いてよくなじませてから縄をなっていく。前当主が亡くなってからは、ススハキにイチシンルイを呼ぶこともなくなり、この作業も行われなくなった。震災前までは、町で注連縄を購入していた。

ススハキモチには、アンコモチとお雑煮を食べていた。豆まきは、囲炉裏で大豆を炒ったものをまいた。豆を炒る係は新屋しんやの主人が担当し、まく係は仁屋の主人が担った。

この日に別家べっかの長老によって、尾形家や小々汐にまつわる伝説が語られることが多かった。

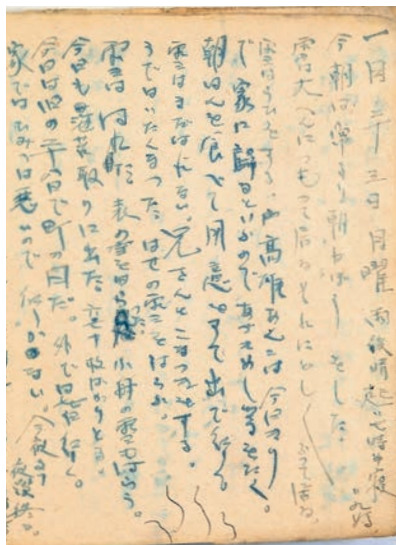
●町の日



OEI32-09

旧暦 1931年 12月 28日
新暦 1932年 2月 4日

二月四日 木曜 雪起 六時半・寝 八時半
朝早く家を出た。今日は二十八日で町の日です。家からお母さんと竹代あねさんが行つた。三時間で歸つた。途中少し頭がいたかつた。家に来ておひるを食べた。町おどを見に松鼻まで見に行つた。来ないので家に歸る。雑誌を読む。頭がいたい。町おどは歸つた。だいたいやうをもらつて来た。おみやげをもらつた。夕はんすぎに頭がいたので早くところにつきました。



OEI33-06

旧暦 1932年 12月 28日
新暦 1933年 1月 23日

一月二十三日 月曜 雨後晴起 七時半 寝 九時
今朝は常より朝ねぼうをした。雪は大へんにつもつて居る。それにどしくふつて居る。雪はらひをする。×高雄あんこは今日きりで家に歸るといふのであづきめし等をたく朝はんを食べて用意をすて出で行く。雪はまだはれない。兄さんとなつきをする。うではいたくなつた。はせの雪をはらふ。雪ははれた。表の雪をはらつた。小舟もはらう。

今日も海苔取りに出た。六七十枚ばかりとる。

今日は旧の二十八日で町の日だ。外では皆行く。

家ではひみじ⁽¹⁾は悪いので行かない。今夜より夜學終る。

(1)「ひみじ」は、日が悪いといった意味で、家を出るのを控える表現か。

に気仙沼市内の新城、所沢といった山間部の主婦が注連縄、松、南天などを売る店を出す。近年では、スーパーなどでも、ホシノタマなどと一緒に販売している。

震災前までは、オオイでも町に正月関係の品物を買に行く日とされた。町の日には基本的には二人で買い物に行く。まず、新年にオシラ様に被せる布であるオセツを買う。購入するのは、七二×一五センチで、主に赤い生地のをを選んで買っていた。同じ店では、新年の挨拶用のおしぼりも購入する。震災前は一二セツを購入していた。

また、お年神様にそなえるお箸や碗、茶碗なども購入する。かつては、若水用のバケツと柄杓^{ひしやく}も買っていたが、震災以前から、すでに買わなくなっていた。仏壇に飾る花も買っている。なお幣束や水引^{みずひき}は鹿折の八幡神社から購入している。

《日記解題》

町の日、旧の一二月二十八日とされる。この日は、町で正月に入用なものを購入する日とされていた。三年の記述で町に出かけた家族が、「お母さんと竹代あねさん」であると記している部分は、後のオオイからの聞き取りと符合する。

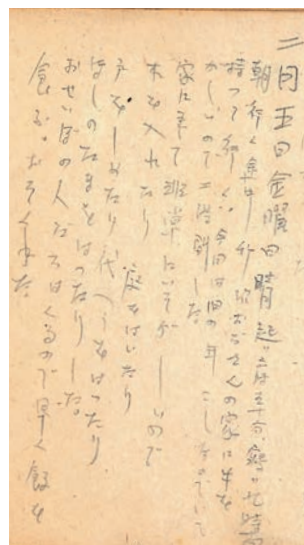
《資料》

他の資料では、市史の一般的な記述をのぞくと、「町の日」についての記述は見当たらない。ただ資料④の仁屋では、オミダサマの箕をこの日に町で購入していたとある。

《聞き取り》

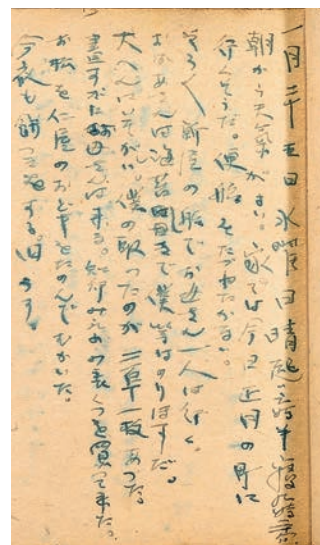
新暦でも二八日から三〇日までの間、内湾地区の港付近

● 年越し



OE32-09
旧暦 1931年 12月 29日
新暦 1932年 2月 5日

二月五日 金曜日 晴起 六時五十分 寝 九時十分
朝行く途中 竹治おちさんの家に半を
持つて行く。今日は旧の年こしなのでいそ
がしいので二時間した。
家に来て非常にいそがしいので
木を入れたり庭をはいたり
戸をしめたり代へう⁽¹⁾をはったり
ほしのたま⁽²⁾をはったりした。
おせいぼ⁽³⁾の人だちはくるので早く飯を
食ふ。おそくねた。



OE33-06
旧暦 1932年 12月 29日
新暦 1933年 1月 25日

一月二十五日 水曜日 晴起 六時半寝 九時二十分
朝から天気がよい。家では今日正月の町に
行くそう。便船をたづねたかない。
やうく新屋の船で母さん一人は行く。
おばあさんは海苔×しきで僕等はのりほすだ。
大へんにいそがしい。僕の取ったのが二百一十枚あった。
晝すぎにお母さんは来る。知行みゑ子の長くつを買って来た。
お松⁽⁴⁾を仁屋のおどやをたのんでむかいた。
今夜も餅つきをする。四うす。

(1)「代へう」はよくわからない。(2)ほしのたまは
正月の紙飾りで、五枚や七枚一組のことが多い。
現在では市販されている。(3)おせいぼという表現
が何度か出てくる。(4)正月の松飾りに用いる松の
こと。

《日記解題》

年越しの記録は、後述する聞き取り
と参与観察の内容に比べて簡潔である。
三二年には、木入れや掃除の他に「代へ
う」、「ほしのたま」を貼る作業に従事し
ている。この他に、「おせいぼの人たち」
がくるので、夕食を早く食べた。とある。
この暮れの慣行については、戦後早い時
期の記録にも記されている。

翌年は、行事の日程が一日ずれてお
り、本来の行事とは、異なる行事が行わ
れている。この年は、この日に町に買い
物で行くが、その時も、通常二人で行く
買い物に栄一氏の母親が一人で向かって
いる。これは、かなりイレギュラーな形



ホシノタマの展示（国立歴史民俗博物館） 2016.1.21 撮影 川村清志



オカミの幣束
2010.12.31
撮影 勝田徹



囲炉裏端の幣束
2010.12.31
撮影 勝田徹
囲炉裏の幣束は12
本置かれるが、閏年
（かつては旧暦の閏
月のある年）は13
本用意される。

ミツミネ様の正月飾り
2010.12.30
撮影 勝田徹
ミツミネ様（イワクラ
様）は、オクヤマイリの
南側の丘陵の中腹に位
置する。



震災前の天王様の正月飾り
2010.12.30 撮影 勝田徹
周囲の林は震災時の火災で延焼したため、2015
年には、全て切り倒された。



震災後の年末のタクバへのお参りの様子
2013.12.30 撮影 川村清志
タクバの周辺は、道路建設の造成工事のために、完
全に失われた。



上 仁屋のオシノグイ
1992.1.2 撮影 川島秀一

右上 オオイの松飾り
2009.12.31 撮影 勝田徹

右下 当主による松飾りの準備
2009.12.31 撮影 勝田徹
オオイでも戦前はオシノグイを作って松飾
りを作ったが、後には縁側の柱に一ヶ所、松
飾りを行うようになった。小正月やそれ以
後の飾りも同様である。



性が暮の挨拶に参集。贈答がある。これ以前に、特定分家が寄り、男性はシメづくり、女は餅つきをし、その飾付も特定分家二戸の分担である」と記されている。

資料④によると、仁屋では一九九〇年代までオシノグイを建てていた。皮を取って白木にした松の木を二本、神棚の正面にあたる庭に立てる。この木に松の枝と栗の枝を飾り、白木の間にナラの木を添えたうえで、注連縄を張る。オシノグイの材は、年の瀬が迫った頃に山から他の松などとともに切りだしてくる。オシノグイの木は、正月が済むとイナグイ（稲杭）として、毎年二本ずつ補給される仕組みになっている。

正月の飾りは、このオシノグイから始まるが、「祝いこむ」といい、外から家の中へ向かって飾り付けをしていき、はずすときは、逆に内から外へと作業していく。また、正月の門松は、どの山から迎えても非難されることはなかった。松ぼんこ（マツボックリ）のついた松は、孫が生まれると行って好まれた。

家の中では、お年神とオミダサマが作られる。

式であった可能性がある。おそらく、生業にさかれる人手との兼ね合いから、仕方のない判断だったと考えられる。

三三年には「お松を仁屋のおどやをたのんでむかいた」とある。この松は、後述するように正月の松飾りに用いる松や注連縄に結わえる松の枝先、あるいは明神様や金比羅様といった小々汐の神様に供える松をさすと考えられる。

ちなみに三三年の元旦に行われた「年越しの作業」では、「うしぬぐいのかわをとる」と記述されている。ここでの「うしぬぐい」という表記の内容は、市史などでは、「オシノグイ」と記述されるものに相当する。この行事には、松の若木の幹も用いるので、それらの素材を頼んだものと考えられる。

《資料》

資料①では、旧暦の二月三日を「御歳暮」と記している。「集落内各戸の男



上 かつての明神社様
1992.12.31 撮影 勝田徹
かつてのお明神社は、林の中にひっそりと
佇んでいたことがわかる。

右 震災後の明神様の正月飾りの様子
2013.12.31 撮影 川村清志
お明様周辺の林も、津波による塩害によ
って枯死したため、ほとんど切り倒され
た。現在、道路工事のために、お明神様の周
辺は、さらに変貌を遂げつつある。



上：金比羅様の正月飾り
1980年代 撮影 川島秀一

左：震災後の金比羅様での祭祀
2014.11.23 撮影 尾形健
金比羅様の石碑も、震災の被害を受けたが、
2012年には、復旧の神事も行われている。



お年神は松の木の皮をむき、ホウキのような形をし
て、先端に幣束を五本挿している。

オミダマ様は、オホトケ（御先祖様）を正月三ヶ
日だけは神様として祀るもので、箕の上にご飯、小
豆餅と白い餅を一重ねずつと、串柿などをのせて
飾った。年越しの日から四日までのあいだ、仏壇の
前に祀られる。オミダマ様は、ローソクを上げるだ
けで、線香はたかない。

ミダマとは亡くなった先祖の霊のことで、三ヶ日
のあいだにシンルイやシンセキが拝みに
くる。オミダマさまに上げたご飯は、三
日間そのままにしておくが、その他の供
え物は後でおばあさんがいただく。

この他に、仁屋では、カケノヨ、ミズ
の餅を作ったり、漁のための船に関する
一連の行事が行われる。

《聞き取り》

松飾り 三〇日は屋外の神々に松飾り
をする。屋敷地内にある明神様（山の神）
には、幣束を立てる。また、鳥居の二本

の柱に注連縄を通し、松の枝を二本の柱
に結わえる。オハネリ（生米）をまいて
から、神前に祈りを捧げる。金比羅様の
石碑、オオイの家からは向かいに位置す
る入山の山腹にあるイワクラ様（磐座様
の意か。ミツミネ様とも言う。こちらに
は鳥居はないので、近くにある木に注連
縄を張る。）、元の屋敷跡と伝えられるタ
クバの近くにある天王様でも同様の所作
を行う。また、タクバの屋敷地にあった
井戸の井戸神様（場所不分明）にも幣束
をたてる。

三十一日は屋内の神々の飾りをする。縁
側の柱に松と栗に昆布と水引を重ねてく
くりつける。この時、枝が五段に分かれ
ている松を選ぶ。

屋敷地内の建物にも幣束を供える。中
門、車庫、石倉、木小屋、板倉、厩、便
所の七カ所である。屋内にも、囲炉裏の
上の屋根裏に二一本（閏年は一三本）、
座敷の屋根裏に七本の幣束をさす。また

水神様と称して裏山から引いている樋の脇にも幣束を立てる。

白ふせ 三一日に皿に生米を敷き、その上に白餅と煮た小豆を搗き込んだ小豆餅を置く。さらにその上に白をかぶせておく。四日の朝に起こす。同じことを小正月の一日の晩にも行い、正月三一日に起こす。

お年神 まっすぐな松の木の皮を剥いて白い棒をつくり、先端にその年に刈った青い稲藁を巻き付けて三ヶ所を縄でしばって箒状にしたものに、五色の幣束をさす。これをお年神様といい、座敷の隅の年神の紙札のそばにたてる。



お歳神と正月飾りの準備

1980.12 撮影 川島秀一

先代当主、尾形忠行氏によるお歳神と正月飾りの準備の様子。



お歳神と正月飾りの準備

1985. 撮影 川島秀一

この頃、オオイの部屋には、柱ごとに、このワラ飾りを供えていた。

オミダマ 箕に餅と小豆餅を五つつ串にさしたものの、干し柿、みかん、勝栗、布海苔を並べ、お年神様のそばに南に向けて天井から吊す。モチを差す串は、アオキの枝を用いた。ただ、震災前は近くにアオキがなかったため、常緑の木の枝で代用していた。

オミダマ様は家によってかなり異なる。隣村の小松家では最も新しい位牌を仏壇から箕の中に移し、餅や菓子、果物を供える。箕は仏壇の前に置き、その口は南に向ける。仁屋でも仏壇の前に設えるのは同様だが、位牌は移さない。餅と小豆餅をずらして重ねて供える。オミダマ様にあげる



上 飾られたお年神とオミダマ

2009.12.31 撮影 勝田徹

右上 国立歴史民俗博物館のお年神とオミダマの展示

2013.12.22 撮影 川村清志

右中 オミダマの内容

2010.12.31 撮影 勝田徹

右下 オテモリ

2010.12.31 撮影 勝田徹

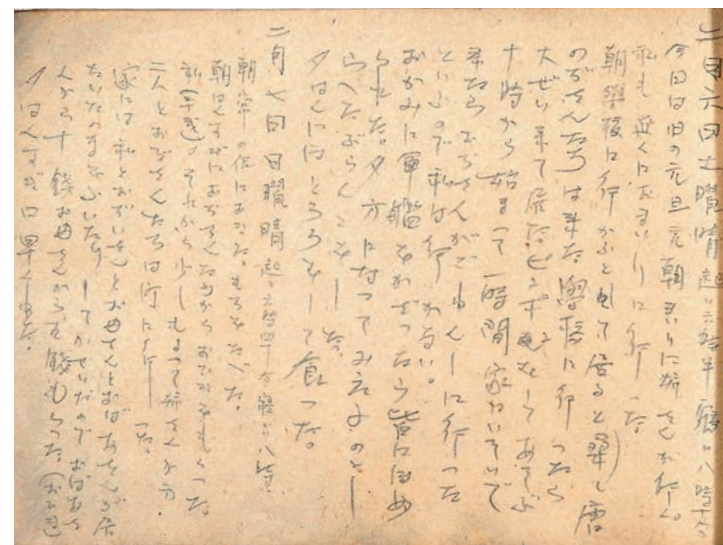


熨斗袋は赤か黒かは迷う人が多い。正月の間は仏様でも神様だ、と言って赤い熨斗袋を用いる場合が多いようだ。

オシラ様 ふだんは箱に入れて神棚の向かいの屋根裏にしまっているが、正月には降ろしてオシラ様を出し餅を供える。またロウソク、線香立ても用意し、左脇にオハネリという米を入れる鉢を置く（五九頁写真参照）。オオイでは、オシラ様を祀っているのので四つ足（動物）の肉と卵も食べてはいけなかった。しかし、現当主の曾祖母の代に「卵だけは食べさせてください」と願って食べるようになった。

にした。肉も家で調理して食べられるようになったのは、今の当主の代からである。それでも、正月一日から一五日までは肉と卵を食べてはいけなかった。一六日の朝にオシラ様をしまうと食べてもよいことになっていた。

● 正月三ケ日 (一九三二)



OEI32-09

旧暦 1932年 1月 1,2日
新暦 1932年 2月 6,7日

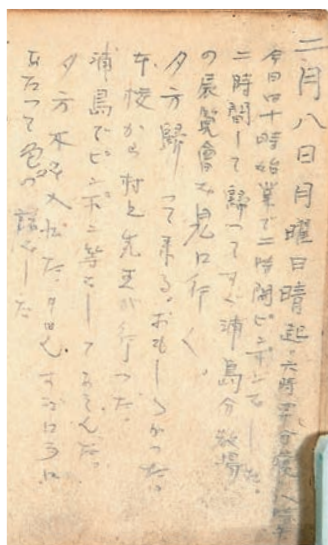
二月六日 土曜 晴起 六時半 寝 八時十分
今日は旧の元旦 元朝まいり⁽¹⁾に姉さんが行く。
私も近くにおまいりに行った。
朝学校に行かふとして居ると桑唐(※入れ換え記号)の皆さんたちは来た。学校に行ったら大ぜい来て居た。ピンポンをしてあそぶ十時から始まつて一時間家にいそいで来たからおちさんがごねんしに行ったといふので私は行かない。
おかみ⁽²⁾に軍艦をかざったら皆にほめられた。夕方になつてみえ子のこしらへたぶらんこをした。
夕はんにはとろろをして食った。

二月七日 日曜 晴起 六時四十分 寝 八時

朝常の位におきた。もちをたべた。
朝はんすぎにおちさんたちからおひきをもらった。私(二十銭)。それから少しもよつて姉さんから二人とおぢさんは町に行った。
家には私とおぢいさんとお母さんとおばあさんが居たいたのまをふいたりしてかせいだのでおばあさ



年越しの夜にいただく御膳
2010.12.31 撮影 勝田徹



OEI32-10

旧暦 1932年 1月 3日
新暦 1932年 2月 8日

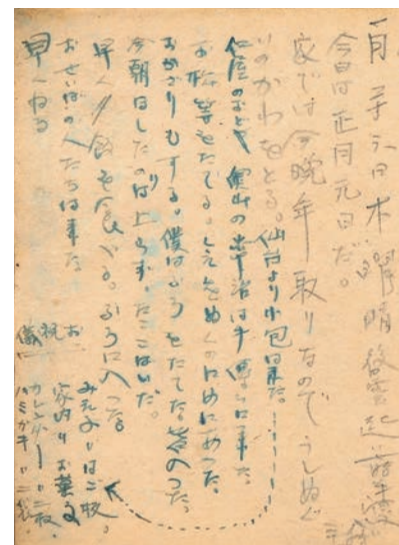
んから十銭おかあさんから五銭もらった(おひき)
夕はんすぎに早くねた。

二月八日 月曜 日 晴起 六時四十分 寝 八時半
今日は十時始業で二時間ピンポンをした。

二時間して歸つてすぐ浦島分教場の展覧會を見に行く。
夕方歸つて来る。おもしろかった。
午後から村上先生が行つた。
浦島でピンポン等をしてあそんだ。
夕方木を入れた。夕はんすぎにろにあたつて色々の話をした。

(1)元朝参り 元旦の朝に周辺の神社や少祠にお参りすること。家により参る場所には違いがあるようである。(2)おかみ 仏壇のある部屋のこと。ここに飾った軍艦とは、「三笠」である。

● 正月三ケ日（一九三三）



OEI33-06

旧暦 1933年1月1日
新暦 1933年1月26日

一月二十六日 木曜 晴後曇 起 七時半寝 八時二十分
今日は正月元日⁽¹⁾だ。

家では今晩年取りなのでうしぬぐ

い⁽²⁾のかわをとる。仙台より小包は来た。

仁屋のおどや 奥山の常治は手傳ひに来た。

お松等⁽³⁾をたてる。くえをぬくのめにあった。

おかざりもする。僕はふろをたてた。皆入った。

みえ子⁽⁴⁾はご板

お 家内 お菓子

儀祝 カレンダー 二枚

ハミガキ 二袋

今朝はほしたのりは上らず。たここはいだ。

早く夕飯を食べる。ふろに入った。

おせいぼの人たちは来た。

早くねる。

- (1)この年は「ひみじ」が悪いといって町の日を一日ずらしており、結果として、元旦も一日ずれたと言うことだろう。(2)「うしぬぐい」は、市史などでは「オシノグイ」と表記されている。正月の松飾りのことをさす。
(3)年越しの日の一連の松飾りと考えられる。

一月二十七日 金曜 晴 起 六時三十五分

寝 八時三十五分

今日は旧の正月二日だ。

家では今日は元日だ。兄さんはお寺

に行く。僕は小々汐中を廻る。

明戸のおぢさんは来た。のりを

はさかす。上った。晝すぎに

うたひの先生は来たので兄さんは行く。

御年始は来たばあさんたちも来る。

一月二十八日 土曜 晴 起 六時半寝 九時

庭をはいたりする。ふとんをはさかす。

御年始の人たちは来た。

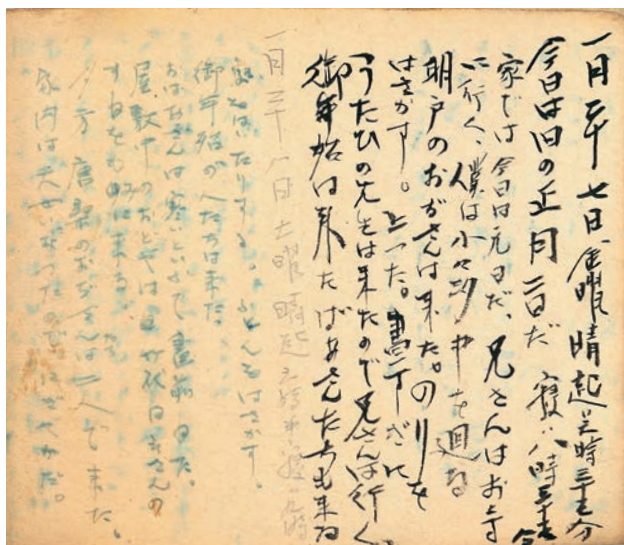
おばあさんは寒いといふて晝前ねた。

屋敷中のおどやは竹代ねゑさんの

すねをも×みに来る。

夕方唐桑のおぢさんたちは二人で来た。

家内は大ぜいになったのでにぎやかだ。



OEI33-07

旧暦 1933年1月2,3日
新暦 1933年1月27,28日

《日記解題》

正月については三二年と三三年の両年にわたって記載されている。ただし、三三年については、正月の行事が本来の暦とは一日ずれている。

元旦の記述としては、三三年の元朝参り、小々汐への年始の挨拶と寺参りが記されている。「元朝参り」という言葉は現在の聞き取りのなかでも確認できた。早朝、一年の最初のお参りに、家の近くの明神様や金比羅様の石碑に向かうことを指していた。

翌年には兄の忠行氏が寺参りに行き、次男である栄一氏は「小々汐中を廻る」とある。この寺参りは通年のものか、前年に祖父が亡くなったことと関連するのは確定できない。小々汐を廻るというのは、おそらくオオイとしての「お年始」の挨拶を指すと考えられる。

また、この夜には「とろろをして食った」とある。長芋のトロロのことである。正月の儀礼食の一つであり、オオイでは、三ヶ日に食べるものがほぼ決まっていた。これらの正月の食べ物については、聞き取りと仁屋の事例を後に紹介する。

次に正月二日になると二ヶ年ともに餅を食べたとある。これもおそらく雑煮のことだろう。その後、三二年の記事

には家族、親族から「おひき」をもらったと記されている。おひきは駄賃に当たる意味だが、ここでは「お年玉」にあたるものだろう。

三日になると特に注目すべき事柄は、両年ともに記されていない。ただ三二年には、「夕はんすぎにろにあたつて色々の話をした」と記されている。誰と話をしたのかもわからないが、このような場で、様々な伝承や昔話が語られた可能性もある。

《資料》

資料①では、午前中、尾形家同族全戸の男性（主人）が参集し、午後は主婦の会合」と記されている。

資料④の仁屋の事例では、正月の新年会、オテガケ、オ門松の御膳、オミダマ拌み、若水迎えなど、多様な行事の様子が記されている。以下では、オオイの聞き取りに対応する事例について紹介する。

若水迎え 家の当主のことを正月中は「年男」と呼ぶが、いろいろな役目があった。まず、若水を迎える。早朝に井戸から水を汲み上げる行事であるが、その時、三回唱えごとを繰り返す。唱えごとは「アキの方からお年男が若水迎えに参りました。何を釣る釣る、福の水を釣り上げる」と

語る。若水を汲むバケツには注連縄、ヒシヤクにはミズヒキがつけられており、白の上に置かれる。

年男はそのほかに元朝参りや、「アサヒ焚き」といって毎朝に豆殻を燃やす役、あるいは馬にシロミズ（米をいんだ水）を与える役があった。正月三日の「洗濯のし始め」には、年男の手ぬぐいを先に洗い、それが済めば、あとはいつでも洗濯ができた。洗濯は一二月二五日の「竿休め」から正月二日まで休んでいる。

白の餅 白を逆さにして、その中に皿を置くが、皿に生米を少しいれてから、その上に小豆餅と白餅を重ねておく。これを「白の餅」と呼ぶ。白の周りにも注連縄をかけ、白の上には、若水を汲むバケツとヒシヤクが、これも注連縄を付けられておかれる。

四日の朝には、年男が白を起こし、杵で白の餅を三カエリ（三度）押しつける。白の餅に付いた生米の量によって、その年の豊作と不作を占う。鍋にもオソナエを上げるが、この「鍋の餅」は年男が食べる。



上 オオイの白の飾り
2010.12.30 撮影 勝田徹
左 国立歴史民俗博物館での白の展示
2013.12.13 撮影 川村清志





上 オオイへの正月の挨拶の様子
2010.1.1 撮影 勝田徹
当主の横にオテカケがあり、奥にはお年神とオミダマ様が見える。かつての尾形家での年始の挨拶も、この年が最後となる。

右 年始の客用の料理とお菓子
2010.1.1 撮影 勝田徹



トロロ塗り 元旦の夜は、トロロ飯を食べる。用いたトロロ芋を雨戸などに塗ってあるくと、家に対して魔よけになる。このトロロを食べると風邪をひかないといわれた。

《聞き取り》

若水 元日に当主が朝五時に起きて水を汲み、その水でお茶を入れ、煮炊きにもその水を用いる。

年頭の挨拶 分家の当主たちが朝八時過ぎから次々に挨拶にやってくる。当主はオテカケ(三宝にみかん、干し柿、勝栗、布海苔、米の粉に煎った豆を混ぜて楕円形にしたものを並べてある)を脇に置いて応対する。小々汐集落全体の新年会は一〇時から会館(公会堂)で行われる。この時もオオイの当主は上席に座る。二日は当主が親戚の挨拶回りに出かける。主婦は家において挨拶を受ける。

正月の食 正月三ヶ日は、ほぼ毎日、

食べるものが決まっている。元旦の朝は、お雑煮を食べる。雑煮には、餅のほかに大根、人参、ゴボウなどの根菜類を入れ、ダシはヨメガイという貝からとっていた。ヨメガイはウラムラサキのことで、かつては小々汐でも取る人がおり、それをゆずってもらっていた。その後、ヨメガイが手に入りにくくなり、サラガイを使うようになった。サラガイはアズマニシキという二枚貝の地域変種のようなのである。

こちらも量は少ないが、地元で取ることができたようである。しかし、サラガイも手に入らなくなったため、近年では、ホタテ貝を用いて雑煮を作っている。

元旦の夜は今もトロロご飯を作る。日記に記されている通りである。二日目も朝は餅を食べた。この時は、アンコ餅にして食べた。二日目の夕食には、ソバを食べることになっていた。三日の朝も餅だが、少し味を変えるためにゴ

マやクルミをつけて食べた。

御歳暮にくる客に出すために、ササギ(大角豆)の煮豆、キンピラゴボウ、昆布の入ったお煮しめなどを作っていた。

以上のオオイの食事の内容は、仁屋の一九九〇年代の正月食とかなり似ているものの、家ごとの違いもあることがわかる(表③参照)。

なお、元日の朝、囲炉裏の火をおこす時には、栗の皮を一緒に燃やした。前年から栗の実を食べたあとに、皮を残して乾燥させる。この栗の皮を三ヶ日の朝に火に入れて燃やしていた。

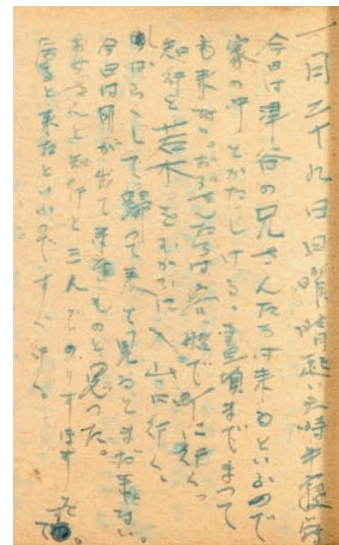


小々汐会館での新年会の様子
2011.1.1 撮影 勝田徹



小々汐の会館(小々汐漁業活性化推進施設)
2011.1.1 撮影 勝田徹
この施設も津波によって全壊した

● 若木迎え



OEI33-07
旧暦 1933年1月4日
新暦 1933年1月29日

一月二十九日 日曜 晴起 六時半寝 八時
今日は津谷の兄さんたちは来るといふので
家の中をかたじける。晝頃までまつて
も来ない。おちさんたちは客船で町に行く。
知行と若木をむかひに入山に行く。
しばらくして歸つて来て見るとまだ来ない。
今日は用が出て来ないものと思った。
お母さんと知行と三人でのりすほすをすて
居ると来たといふのですぐ行く。

《資料》

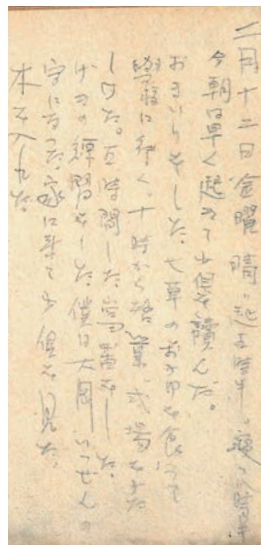
(資料④) では、この日は「山入りの日」とされた。山でウルシとマンサクと栗の木を伐ってくる。この三種の木で「嬉し万作来る」という文句にかけている。山に行くときは、モチと御幣束を持ち、木を伐る前に御幣束を地面に挿し、餅をあげて拝む。そのモチは削らずに持ってきて家に戻ってから「山」という字を書き、「山の餅」と呼んで船に置いておく。もし海で具合が悪くなったときに、このモチを少し食べさせると元気になるという。

ウルシとマンサクと栗は二把用意しておき、一把は七草粥を炊くときに用い、もう一把は一五日の松納め粥を炊くときに用いる。

《聞き取り》

若木迎えは、前当主の忠行氏が行っていた。場所はよくわからないが、それほど遠くではないだろう。かつては、この若木を使つて、七草粥を作っていた。

● 七草



OEI32-11
旧暦 1932年1月7日
新暦 1932年2月12日

二月十二日 金曜 晴起 五時半。寝 八時半
今朝は早く起きて少俱⁽¹⁾を讀んだ。
おまいりをした。七草のおかゆ⁽²⁾を食つて
學校に行く。十時から始業式。式場をかた
しけた。五時間した。當番をした。
げきの練習をした。僕は太岡いつぜんの
守になつた。家に来て少俱を見た。
木を入れた。

二月一日 水曜 晴起 六時十分寝 十時
今朝早くおきてたくばの天王⁽³⁾さまに
おまいりに行く。
のりをほす。かへす。今日はコイコのおがやは
手傳ひに来た。に×わのひきつがへをかたじけて
おそくねる。

(1)雑誌、『小年俱樂部』のこと。日記には、繰り返し登場する。(2)この七草は当主によつて細かく刻まれる。ただし七草自体は、前日に主婦が用意していた。(3)「たくば」は、小々沙のオオイの家から丘を一つ越えた南側斜面に位置する。

《日記解題》

一月の七日の七草については、二つの行事が記されている。

一つは、七草^{ガユ}粥に関する行事である。三二年の日記には、「七草のおかゆを食って學校に行く」と書かれている。このおかゆがどのようなものであったのかは後述する聞き取りとその他の資料から類推することにした。

もう一つは、お参りについでに記述である。三二年もおかゆを食べる前に「おまいり」をしたとされる。三三年には、「今朝早くおきてたくばの天王さまにおまいり」に行ったと記している。どうやら、三二



仁屋で用意していた七草
1987.1.7
撮影 川島秀一
この写真は、1980年代に撮られた仁屋の七草。オオイでも同じように畑の菜を含めて七草を用意していた。



七草を叩こうとする仁屋の尾形栄七翁
1980. 撮影 川島秀一

をサイバン（まな板）に置いて、「ドウドの鳥は田舎の土地に渡らぬうちに七草はだく、七草はだく、七草はだく」と三回唱えながら叩くとされる。

また仁屋では、お参りには、天王様だけでなく金比羅様にも参っていた。

《聞き取り》

七草は、七日の早朝に当主によって細かく刻まれる。ただし七草自体は、前日に主婦が用意していた。

一般に七草粥と言えば、スズナ・スズシロ・セリ・ナズ

年の早朝のお参りも「天王さま」を訪れたと考えてよさそうである。

「たくばの天王さま」は、同じ小々汐内でも、オオイの家からはやや距離があるうえに丘を一つ越えた所に位置する。かつてタクバには、オオイの旧邸があったと伝承されている。そのため年末、年始には、このタクバにもお参りやお供えが行われていた。

天王様は、そのたくばより海側の丘の林内にあった。震災前は杉林の中にあり、屋でも薄暗い雰囲気であったが、震災後は、周囲の木が切り倒されてかつての面影は見られない。

《資料》

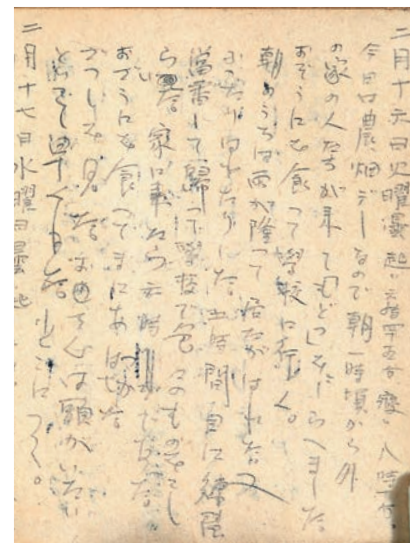
資料①には、七草についての記述はない。個別の家の儀礼に関わるものだからかもしれない。

資料④では、仁屋で揃える七草は、「ムギ、コムギ、ヨモギ、ダイコン、ナツパ、セリ、ホウレンソウ」であった記されている。ここであるナツパは、ダイコンバをさす。いずれの場合も七種類の草を揃えることが重要で、その中身についての細かな規定はなかったのではないだろうか。また仁屋では、年男が若水で手足を洗い、口をすすいでから、草

ナ・ゴギヨウ（ハハコグサ）・ハコベラ・ホトケノザ（オニタビラコ）とされる。しかし、小々汐の事例は、これらとは異なっている。そもそもこの季節の小々汐では、セリやハコベラは生えているが、ゴギヨウやホトケノザは、まだ芽も出していない。そこでオオイでは、主に田の野菜を用いて七種類の葉物を集めていた。白菜やほうれん草なども用いていたという。草を叩くときには、「ドウドのトリが渡らぬうちに七草叩け、七草叩け」と唱える。また、オオイの七草粥には小豆やおモチがはいっており、かなりポリウムのあるものであった。

震災後も、タクバの天王様へお参りに行っていた。天王様へは、この日が初めてのお参りとなる。かつては、林のなかにあったので、ロウソクを持ってお参りに行っていた。現在でも、それほど早い時間ではないが、お参りは続いている。

● ノウハダテ



OEI32-12

旧暦 1932年 1月 11日

新暦 1932年 2月 16日

二月十六日火曜 曇起 六時四十五分寝 八時十分。

今日は農畑デー⁽¹⁾なので朝一時頃から外の家の人たちが来て「もどつ」⁽²⁾をこしらへました。

お昼うに食って学校に行く。

朝のうちは雨が降って居たがはれた。

ふったりはれたりした。五時間目に練習。

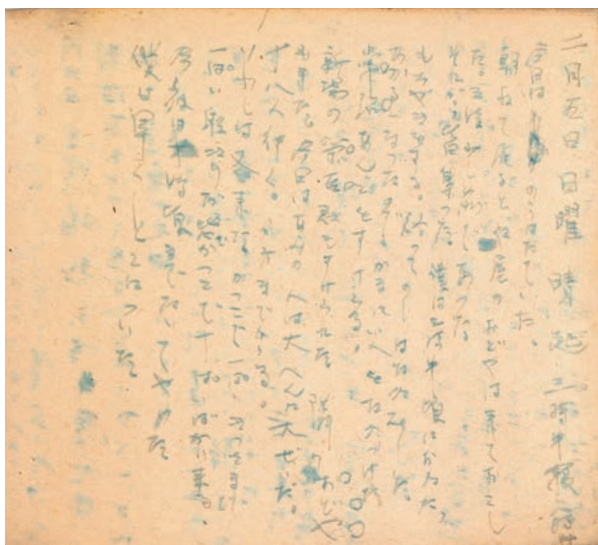
當番して歸って學校で色々のものをこしらへた。家に來たら六時で×あった。

お昼うに⁽³⁾を食つてまにあはせた。

ざつしを見た。岡三は頭がいたい

といつて早くねた。とこにつく。

(1) ノウハダテがこのように表記されている。(2) 「もどつ」は、元綱のことを指すとされる。(3) 朝食から続けて雑煮を食べている。固定された行事食ではないが、やはりノウハダテの日は餅をたべることが多かったようである。



OEI33-09

旧暦 1933年 1月 11日

新暦 1933年 2月 5日

二月五日日曜 晴起 五時半寝 八時半

今日は×××のうはだ⁽¹⁾だ。

朝ねて居ると仁屋のおどやは来ておこした。五時少し前であつた。

それがら皆集つた。僕は五時半頃におきた。

もちやき⁽²⁾をする。終つてのりはたきをした。

あかるくなつたのでかまに火をたきつけた。

常治あんこをすけらる。

新場の榮吉・君もすけられた。隣のおどや

も来た。今日はあみの人は大へんに大ぜいだ。

十八人行く。夕方までかゝる。

いわしは又来た。かつこで十ぱいばかり来る。

一ぱい

今夜は十時頃までたいてやめた。

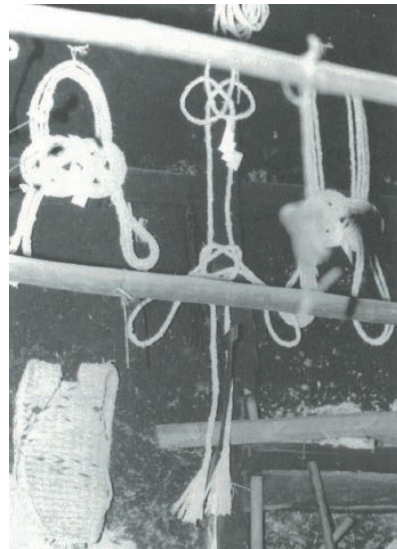
僕は早くとこについた。

(1) 前年とはかなり異なる表記になっている。(2) この餅は、お供え物の鏡餅をさすようである。

《日記解題》

ノウハダテについては、二カ年ともに記されている。興味深いのは、文字の当て方である。三二年には、「農畑デー」と記し、三三年には、「のうはだでい」と表記している。前者では、デーが英語の DAY を表しているかに見える表記であるが、その意図はよくわからない。ただ、当時、一〇代半ばであった栄一氏が、この日の行事内容やその意味づけを踏まえて字を当てたものだろう。

この行事はかなり早い時間から始められたようで、三二年には、朝一時頃と記されている。未明というよりは深夜である。翌年は、午前五時少し前に仁屋に起こされたところ



ノウハダテの元綱（気仙沼市赤岩高前田）
1983. 1 撮影 川島秀一



オオイの屋内にかけられていた元綱
2011.1.1 撮影 勝田徹

バミ（朝食）として食べた。

仁屋でも、臼のモチ・鍋のモチ・ミズの餅などは、この日に下ろし、包丁を立てずに、餅箱の縁で欠いてから、お雑煮に入れた。このときの餅のことを「コバヤシ餅」と呼んだ。ノウハダテが済んだ午後には、小正月に飾るメエーダマの木を伐りにいく。

《聞き取り》

ノウハダテも、震災前にはすでに行われなくなっていた。

るが、すでに別家の者たちは、オオイで作業をしていた可能性が高い。このあと、モチヤキをしたとあるので、栄一氏が起こされたのは、この餅を朝食として一緒に食べるためだったのかもしれない。

別家の者たちが集まり、「もどつ」をこしらへ」とある。これは後述の仁屋の報告にある「モトツ（元綱）」と同一のものだろう。

《資料》

資料①、②では、ノウハダテ（農始め）と記される。スハキと同じく、特定分家六軒が、「未明に参集し、初仕事をし、朝食を済まして帰る」と記されている。仕事内容については記されていない。

資料③では、ノウハダテについては、「農ハダデ」と記され、「年が開けて初めての農作業を行う日」と紹介されている。

資料④の仁屋の事例では、「農ハダテ」と記されてオオイについての事例が紹介されている。

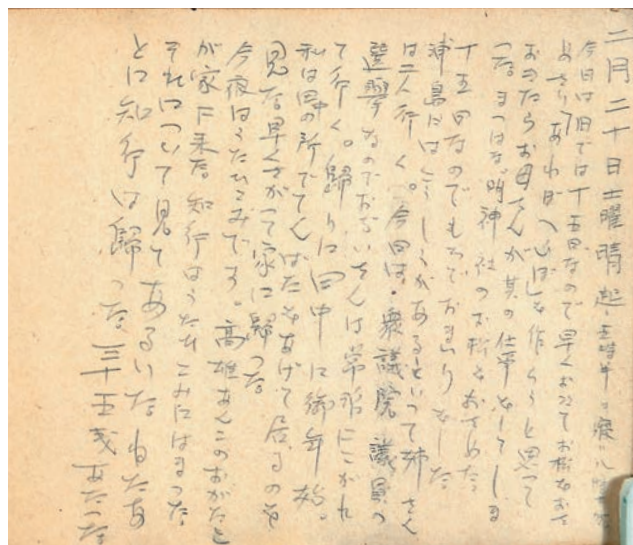
仁屋を始め、別家四軒が行き、モトツ（元綱）を緋い、叶結びにしてから、オクラダイの上の壁を飾った。オオイではこの日、オシラサマに供えたモチを下ろしてからアサ

仁屋の記述やオオイでの聞き取りから、一九九〇年代の終わり頃には、行事も行われなくなったようである。

イチシンルイが来ていた頃には、お供えの鏡餅を割って、囲炉裏の側の切り子の上にのせてよく焼いた。餅は相当硬くなっているのので、焼いてから、さらに熱いお湯にいれて、きな粉をつけて食べた。その味が良かったと手伝いに来ていたシンルイの人たちが語っていた。

しかし、別家を呼ばなくなった後も、前当主の忠行氏（栄一氏の兄）は、この日の未明に起きて、自分で縄をなっていた。できた何本かの縄をかつての通りに土間のオクラダイのところにかけていたが、特に複雑な結び方などはしていなかった。

● 小正月



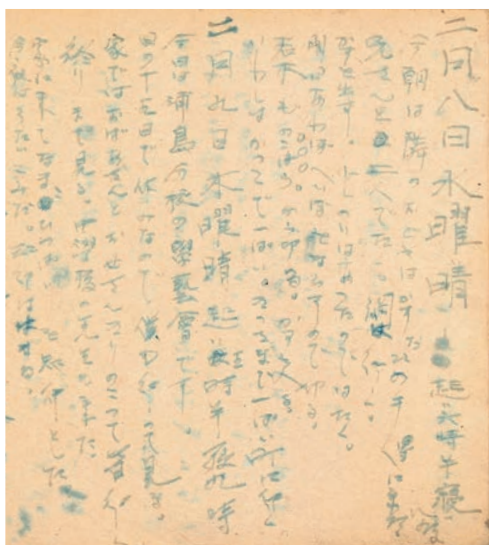
OEI32-13

旧暦 1932年1月15日

新暦 1932年2月20日

二月二十日土曜晴起五時半寝八時十分
 今日旧では、十五日なので早くおきてお松をおさめたり「あわほへいぼ」⁽¹⁾を作らうと思っておきたらお母さんが其の仕事をしてしまつた。まつはな。明神社⁽²⁾のお松をおさめた。十五日なのでもちでおまいりをした。浦島にはこうしん⁽³⁾があるといつて姉さんは二人行く。今日は、衆議院議員の選挙なのでおちいさんは常治にこがれて行く。歸りに田中に御年始。私は田中のところまでんばた⁽⁴⁾をあげて居るのを見た。早くさがって家に歸つた。今夜はうたひこみ⁽⁵⁾です。高雄あんこのおがたとが家に来た。知行はうたひこみにはまつた。それについて見てあるいた。ねたあとに知行は歸つた。三十五歳あたつた。

(1) 栗穂稗穂のこと。(2) 松鼻。小々汐内の家の屋号を指し、この家の近くに金毘羅の石碑がある。明神は、オオイの家の裏手にある小祠。(3) 庚申講のことか。(4) テンバタは風のこと。(5) 大漁ウタイコミのこと。子どもたちが大漁祈願の唄を歌ってまわる。



OEI33-10

旧暦 1933年1月14、15日

新暦 1933年2月8、9日

二月八日水曜晴起六時半寝八時
 今朝は隣のおどやはかすたきの手傳に來た。兄さんと×二人でたく。網は行く。かすを出す。少しのりはあつたのではたく。明日あわほへいぼをならすので切る。若木⁽¹⁾ものこぼらから切る。かすを入れる。いわしはかつこ⁽²⁾で1ぱいきつさま⁽³⁾で一ぱい町に行く。

二月九日木曜晴起五時半寝九時
 今日浦島分校の學藝會です。旧の十五にちで休みなので僕も行つて見る。家ではおばあさんとお母さんきりのこつて皆行く。終りまでみる。中學校の先生は來た。家に來てなま×こひつぱり⁽³⁾を知行とした。今夜はうたいこみだ⁽⁴⁾。知行ははまる。

(1) 若木とは、アワボヘイボをかざる木のことかと考えられる。(2) 小型の磯舟の名称。気仙沼では敷板が一枚の船をカッコ、またはサツパと呼ぶ。(3) 「なまこひつぱり」は、ナマコドリ(ナマコヒキ)と呼ばれる行事のこと。(4) うたいこみは、前年に同じ。



アワボヘイボ（気仙沼市新月）
1982.1 撮影 川島秀一



仁屋のメエーダマならし
1991.1.14 撮影 川島秀一



上 仁屋のナマコドリ（ナマコドーリ）
1991.1.14 撮影 川島秀一

下 ナマコドリ（気仙沼市太田地区）
1999.1.14 撮影 川島秀一

《日記解題》

小正月には多くの行事があったことが記されている。他の行事と同様に小正月の前日から準備作業が行われた。主要な作業としてアワボヘイボ、すなわち「粟穂稗穂」の準備がある。三年の日記には、前日のアワボヘイボの切り出しに加えて、それらを成らせるための若木の用意も行われていた。この若木は、ノコボラから切るとあるが、その具体的な場所は不明である。また、この日には松を収めたところ。次に三年の日記には、栄一の姉たちが、浦島の「こうしん」に行ったとされている。これはおそらく庚申講のことだと考えられる。

また、この夜には、「うたひこみ」が行われていた。小々汐の集落内を、子どもたちが大漁祈願の唄を歌ってまわる行事である。栄一氏は、弟の知行氏が歌ってまわる様子を「見てあるいた」と記しており、自身は参加していなかったことになる。翌年も、弟の参加が記されているのみで、自身が参加したとは書いていない。これは個人的な性格というより、歌い込みに参加する年齢に一定の上限があったと捉えた方がよいだろう。そのおおよその上限は、兄弟の歳の差から考えて、一二歳前後ではないだろうか。

最後に三三年には、栄一氏と知行氏が「なまこひつぱり」

カセドリ・大漁祝い・ナマコビキ・成木責め」などの行事が行われたことが紹介されている。これらの行事は、次に示す④の仁屋の事例にも紹介されている。

オオイでは、早い時期に行われなくなったアワボヒエボだが、仁屋でも一九八〇年代にはすでに休止されていた。ただ仁屋では、アワボヒエボについての伝承は残されていた。また、アワボヒエボの代わりに「メエーダマならし」が行われていた。これらの行事の関係は、次のように記されている。

まず、アワボヒエボは、カツノキ（ヌルデ）の木を三〇センチほどにきり、皮を削らないものをアワ、削ったものをヒエと称して、六本ずつ一二本を飾る。これらは、切ってきた栗の木に竹を通して吊り下げていた。

一九九〇年代まで仁屋では、アワボヒエボの代わりに「メエーダマならし」が行われていた。これはミズキに小さく丸めた紅白の餅をならせて、家のオガミに飾る行事である。伝承によると家でメエーダマを生らす年は、外でアワボヒエボは行わず、外でアワボヒエボを吊るした年には、メエーダマをならさなかったとされる。

をしたと記されている。文字通りナマコにワラヒモをつないで引っ張っていく行事である（ナマコをワラで巻いて小さな俵のような形にする地域もある）。家に来てから行ったと記されているので、オオイ個別の家の行事として行われたと考えられる。

《資料》

資料①には、小正月の記述がない。資料②には、松納めの他に、「物真似」というカテゴリーの中で「アワヘボ・

左 起こされた臼
2010.1.15
撮影 勝田徹
右 臼モチ
2010.1.15
撮影 勝田徹



ボは継承されておらず、第一別家の仁屋でも行われていなかった。アワボヘイボの行事がなくなった正確な年代はわからないが、戦時中の家人が極端に減少し、人出が足りなくなった時期か、戦後の生活改良運動に準じて、行事を簡略化した際と考えられる。

同様にナマコドリ、子どもたちによるウタイコミも行われていない。これらは、戦後から高度経済成長期にかけて、休止されていったようである。

ちなみにオオイは、メエーダマについて全く記憶していない。かつてオオイの家の長屋門の前に自然にミズキの木が生えてきたことがあった。それを見つけた仁屋の家族



上 オオイのスギとツタの飾り
1980. 撮影 川島秀一

下 スギとツタの展示（国立歴史民俗博物館）
2014. 1..29 撮影 川村清志

上 オオイのササとコブの木の飾り
1980. 撮影 川島秀一

下 ササとコブの展示（国立歴史民俗博物館）
2014. 1.14 撮影 川村清志

同時期の仁屋は、ナマコドリも家礼として行ってきた。一五日の昼間に、子どもたちが、縄で結わえたナマコを引ながら、家の回りを、唱えごとを語りながら一周する。一人の子どもがナマコを引き、もう一人はそのナマコを栗で打ちながらあるく。栗の木は門松に飾られた木を用いる。唱えごととは「ナマコドリーのお通りだ。モンモラモジ、除けさいだ。こちらの旦那様、金持ちだ。銭と金、舞い込んだ」と大きな声で語る。

《聞き取り》

日記に記された小正月の行事の大半は、今日ではみることができない。すでに一九八〇年代でもアワボヒエ

が、この木は家で使うから切らないで欲しいとオオイに願ったことがあった。

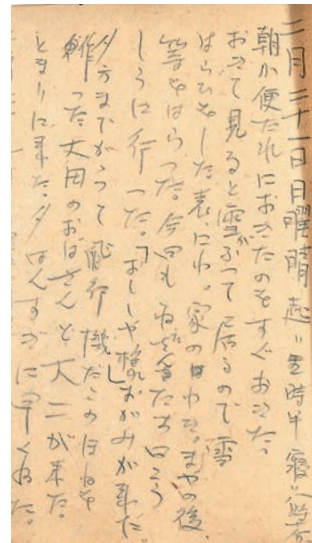
震災前に行われた小正月の行事については、次のように記されている。

小正月 一五日のうちに門松に笹とコブの木とを結わえておく。「ささ（笹）、喜（コブ）べ」という意味だという。三一日には漆と杉を結びつける。これは「うれし（漆）く過ぎ（杉）た」という意味だという。

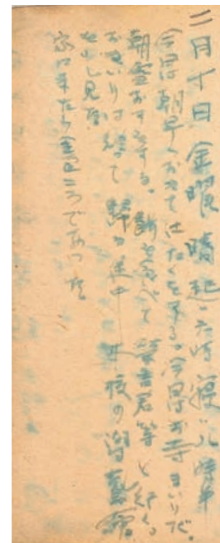
ただしここでウルシと呼ばれるのは、実際には、キツタである。この時期、落葉樹であるウルシは、葉を落としていく。仁屋では、同じくキツタと杉を飾るが、その際は、「すぎて伝わる」という語呂合わせであると語られる。

巳年の餅 現当主の奥さんが記憶している小正月の行事として、この日に巳年の餅を作った記憶がある。これは、家族だけでなく、仙台などに住んでいる親戚の分も作った。巳年の者の人数だけ作った餅を紙に包んで、何事もないうにと祈りながら、自分の体にこすりつけ、まだ暗い時間に近くの海に投げてくる。この時、決して振り返らずに家に戻らないといけない。実際にこの行事を行った日は、定かではないが、餅を作るのは小正月の日であった。

● オシラ様遊ばせ 寺参り



OEI32-13
旧暦 1932年 1月 16日
新暦 1932年 2月 21日



OEI33-10
旧暦 1933年 1月 16日
新暦 1933年 2月 10日

二月二十一日日曜晴起〓五時半 寝〓八時十分
朝小便たれにおきたのをすぎおきた。

おきて見ると雪がふつて居るので雪
はらひをした。表にわ、家のわき。まや⁽¹⁾の後
しろに行つた。「おししや様」⁽²⁾おがみが来た。
夕方までかゝつて飛行機だこのほねを
作つた大田のおばさんと大二が来た。
とまりに来た。夕はんすぎに早くねた。

(1)馬屋のことか。(2)表現が特異だが、おそらくオシラ様と考えられる。

二月十日金曜晴起〓六時寝〓八時半

今日は朝早くおきて仕たくをする。今日はお寺まいりだ。
朝雪おすをする。餅を食べて榮吉君等と行く。
おまいりは終つて歸る。途中本校の學藝會
を少し見た。家に來たら晝ころであつた。

《日記解題》

この両日は共に旧の一月一六日にあたる。二年間の記述
に共通する行事は見当たらない。後述する資料①の報告の

なかに、この日についての記述がなければ、見落とす可能
性が高かつただろう。

まず、三二年には、ただ一行「おししや様」おがみが



オシラ様
2010.12.31 撮影 勝田徹
震災前までは、正月にだけオ
シラ様を棚から出して、ナカ
マに飾っていた。

来た」と記されてい
る。これは、どうや
らオシラ様と考えら
れる。オシラ様につ
いては、栄一氏自身
は、いかなる活動も

この記述も非常に簡潔であるが、内容的には、二年間の日
記の内容を合わせたものに近い。日記の通りなら、オシラ
様を拝むに際して、宗教的な職能者であるカミサマを招い
て、オシラ様遊ばせを行ったと考えられる。

資料③によれば、気仙沼では、オシラ様の祭日を「旧暦
の三月と九月の一六日になっているが、それに正月の一六日
を加えているところもある。また、正月だけ祀っている家
もみられる」としている。

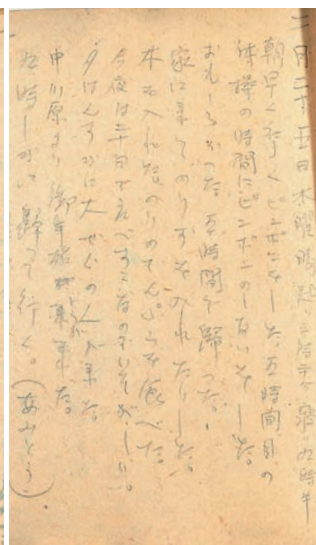
《聞き取り》

今でも、お寺参りはある。小々汐の旦那寺は鹿折の興
福寺なので、皆、そこに参ることになっていた。一六日
かどうか確証はないが、当主の奥さんが嫁いで來られた
一九七〇年代後半の頃でも、「オシラ遊ばせ」は行われて
いた。その頃もおがミサマを呼んでオオイで行っていた。
オガミサマがいない時には、主婦たちが鹿折の八幡様に行
き、拜んでもらつてから、休憩を挟んで家路についていた。

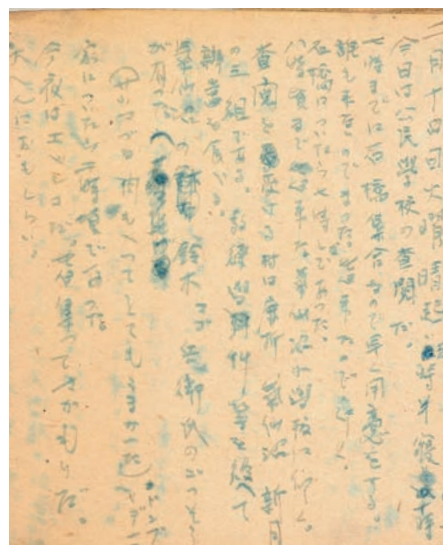
《資料》

資料①には、「仏おがみ」の日とされ、「午前中は男、午
後は女の集まりで、本家の「オシラサマ」を拝む」とある。

● エビス講



OEI32-14
旧暦 1932年 1月 20日
新暦 1932年 2月 25日



OEI33-11
旧暦 1933年 1月 20日
新暦 1933年 2月 14日

二月二十五日 木曜晴起 六時二十分寝 九時半

朝早く行くピンポンをした、五時間目の

体操の時間にピンポンのしあいをした。

おもしろかった。五時間で帰った。

家に来てのりすを入れたりした。

木を入れた。のりてんぶらを食べた。

今夜は二十日でえべすこなのでいそがしい。

夕はんすぎに大ぜいの人が来た。

中川原より御年始等が来た。

九時しぎに歸って行く。(あみとう)。

二月十四日 火曜晴 五時半寝 十時

今日は公民学校の査閲だ。

七時までに石橋集合なので早く用意する。

誰も来ないのでまった。皆来たので行く。

石橋についたら七時しぎであつた。

八時頃まで皆来た。氣仙沼小學校に行く。

査閲を×受ける村は鹿折、氣仙沼、新月

の三組である。教練學×科等を終へて

辨當を食べる。

氣仙沼の鈴木マゴ兵衛氏のごつそう

が有った

(サツマづる肉も入つてとてもうまかつた) ドンブリデ一つ。

家についたら二時頃であつた。

今夜はエベシコだ。皆集つてさかもりだ

大へんにおもしろい。



上 オオイのエビス講に供えられ
たドンコの田楽
2010.12.16 撮影 川島秀一
下 仁屋のドンコ汁
1990.12.10 撮影 川島秀一

《日記解題》

エビス講は、「エベスコ」、「エベシコ」と表記され、両年ともに旧暦の一月二〇日に行われている。

簡潔な記述であるが、両年ともに、オオイに多くの人が集まったと記されていることが注目される。

《資料》

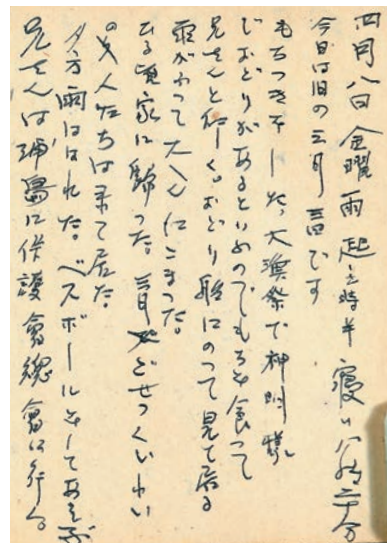
エビス講については、旧の一〇月二〇日として紹介されることが多い。資料④には次のように記されている。

エビス講 俗に「財布ざかな」と呼ばれるドンコ（エゾアイナメ）をあげる。ドンコは根魚の類で、食べたものを口から出すので、「財布ざかな」と呼ばれる。ドンコは二

《聞き取り》

震災前の聞き取りでは、「エビス講」は、年末に恵比寿大黒に魚を用いた膳を夕方に供えていた。恵比寿大黒の紙札が貼ってある下に膳を二つ置く。オオイではドンコの田楽を作る。別の機会には、ドンコ汁を作ることもあると語られている。家の中だけで行われるものである。

● 桃の節句



OEI32-26

旧暦 1932年 3月 3日

新暦 1932年 4月 8日

四月八日 金曜 雨 起 六時半 寝 八時二十分

今日は旧の三月三日です

もちつきをした。大漁祭で神明様⁽¹⁾

でおどりがあるといふのでもちを食って

兄さんに行く。おどりに船につて見て居る

雨がふつて大へんにこまつた。

ひる頃家に歸つた。三月ごせつくいらい⁽²⁾

の人たちは来て居た。

夕方雨ははれた。ベスポールをしてあそぶ

兄さんは浦島に保護會總會に行く。

(1) 神明様は、内湾地区の五十鈴神社のことをさすと考えられる。(2) 桃の節句に「節句祝い」という名目で来客のあったことがわかる。

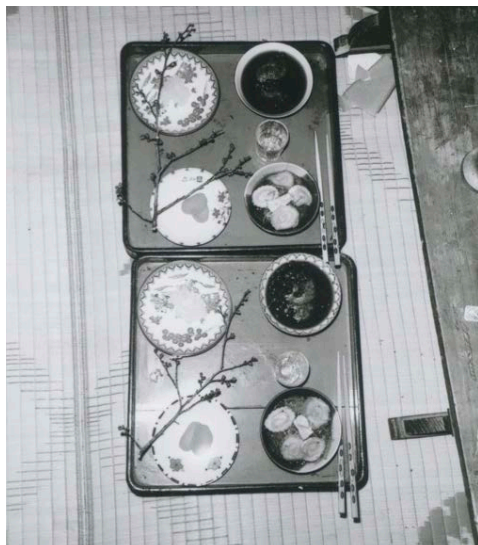
《日記解題》

桃の節句は、三二年の日記にしか記されていない。三三年の旧三月三日には、特に記載がないので、ここでは省略した。この約一月前（一九三三年三月四日）に起きた昭和

の大津波の余波で、行事そのものが自粛^{じしよく}されたと考えるのが妥当だろう。

では、通年の行事と考えられる三二年は、どのように行われたのだろうか。

日誌によれば、まず最初に餅つきが行われたとある。この時のモチについては、後の聞き取りによって補足される内容がある。次に栄一氏たちは、神明様の大漁祭を見物にいった様子が記されている。神明様は小々汐を含めた四ヶ浜には見当たらない。おそらくこれは、内湾地区の



仁屋の3月の節句の膳

1986.4.11 撮影 川島秀一

仁屋でも、梅の枝を膳に添えていたことがわかる。

五十鈴^{いすず}神社のことだと考えられる。この神社での大漁祭に「おどり」が奉納されたので、兄と一緒に見物に行ったとある。行事は午前中に行われていたようである。午後になって帰ると「ごせつくいらい」の人がきていた。桃の節句にもオオイに人が訪れていたことが確認できる。これは、後述する資料①の小々汐内での「節句礼」に相当するものと考えられる。

《資料》

資料①には「節句礼」男のみ」と記されている。資料②には、特に記述がない。

資料④の仁屋の事例では、この日は「ヨモギを入れた菱餅に梅の花をそえて、神様へあげる」とある。

《聞き取り》

桃の節句には、白餅と草餅^{ひしもち}の菱餅を作った。そこに梅の花や蕾^{つぼみ}のついた枝を添えて、神仏に供えた。神様には計六つ、仏前には計二つ供えた。三月の節句に関しては、新暦で行っていたはずである。

●旧の十六日

四月二十一日木曜。晴。起。八時。寝。八時二十分。今日。は。旧。の。十。六。日。な。の。で。ま。ん。じ。ゆ。を。作。つ。た。大。へ。ん。に。う。ま。か。つ。た。お。母。さ。ん。は。二。十。一⁽¹⁾。に。行。く。ひ。る。す。ぎ。に。田。の。し。り⁽²⁾。に。死。人。は。よ。つ。た。と。い。ふ。の。で。大。さ。わ。ぎ。し。た。ず。ん。さ。等。は。来。た。夕。方。お。×。母。さ。ん。は。×。歸。つ。て。来。た。早。く。ね。た。

OEI32-29
旧暦 1932年 3月 16日
新暦 1932年 4月 21日

十月十五日土曜。晴。起。六時十分。寝。九時。朝。は。ん。を。食。べ。る。十。六。日。旧。の。ま。ん。ぢ。う。を。食。ふ。大。作。と。二。人。で。し。ば。た。て。を。す。る。大。工。は。来。た。夕。方。新。場。の。ぢ。い。さ。ん。は。悪。い。の。で。ガ。ケ。ま。で。お。ば。ん。さ。ん。を。む。か。ひ。に。行。く。

OEI32-67
旧暦 1932年 9月 16日
新暦 1932年 10月 15日

四月十日（月）晴。起。六時半。寝。九時半。今朝。は。十。六。日。ま。ん。じ。ゆ。う。だ。朝。早。く。よ。り。作。る。大。変。に。う。ま。い。海。苔。を。取。り。に。行。く。二。百。ば。か。り。取。る

OEI33-25
旧暦 1933年 3月 16日
新暦 1933年 4月 10日

十月十五日土曜。晴。起。六時十分。寝。九時。朝。は。ん。を。食。べ。る。十。六。日。旧。の。ま。ん。ぢ。う。を。食。ふ。大。作。と。二。人。で。し。ば。た。て。を。す。る。大。工。は。来。た。夕。方。新。場。の。ぢ。い。さ。ん。は。悪。い。の。で。ガ。ケ。ま。で。お。ば。ん。さ。ん。を。む。か。ひ。に。行。く。

(1) 気仙沼市の少し山あいの集落の名前。(2) 小々汐内の地名。



仁屋にてマスに入れて供えられた十六ダンゴ
1985. 5.5 撮影：川島秀一

《日記解題》

日記には、計三回、旧の十六日という表現が出てくる。三三年は、旧暦の三月一六日と九月一六日がそれにあたり、三三年には同三月一六日に記載がある。いずれも、マンジュウを作ったことが記されている。栄一氏はこのマンジュウが気に入っていたようで、繰り返し、「大変にうまい」と書き残している。ただしこの日にどのような意味があったのか、記されていない。何かの信仰の対象があったのか

も明確ではない。とりあえず、旧暦の三月と九月の一六日が、ともに「旧の十六日」として意識されていたことが確認できるとどまる。

《資料》

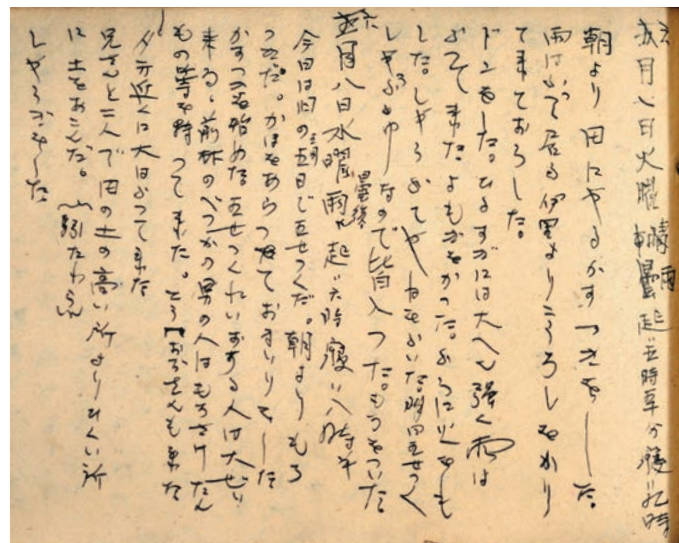
資料①、②では、この両日に女性による「オシラ様おがみ」が行われるとしている。

資料④の仁屋の事例では、この日を「農ツラサマ」と呼び、田畑の神様を祀る日としている。資料③でも、この慣行が気仙沼に広くみられることが確認できる。仁屋でも、田畑の神様へマンジュウを一六個作って祀った。この日はできるだけ遅く田畑に出るものとされ、逆に九月一六日の農ツラサマの日は、できるだけ遅く田畑に出るものとされた。いくらからでも長く、田畑にいてもらうためだという。

《聞き取り》

一九八〇年代の中頃は、オオイでもマンジュウを作っていた。上新粉を練り、そのなかに小豆のアンコを入れて、お湯で茹でて作った。大変美味しいそうだったが、すぐに食べることはできず、まず、神様に供えていた。この頃は忙しいため、前日の夜に用意していたからである。

●端午の節句

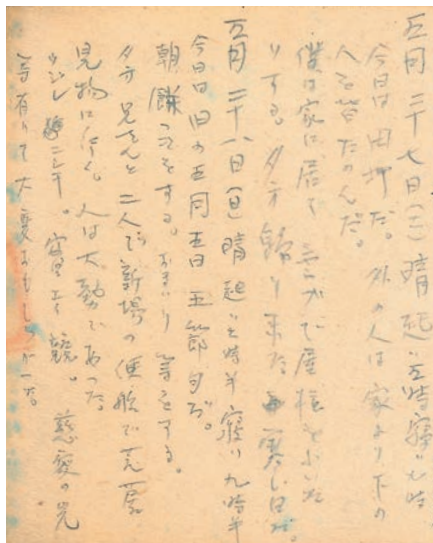


OEI32-41

旧暦 1932年 5月 4,5日

新暦 1932年 6月 7,8日

×六月七日 火曜 ××雨 起〓五時五十分 寝〓九時
 朝より田にやるかすつきをした。
 雨はふつて居る伊里よりこうろしをかり
 て来ておろした。
 ドンをした。ひるすぎには大へん強く雨は
 ふつて来た。よもぎをかった。ふろに火をも
 した。しやうぶてやねをふいた。明日五せつ
 しやうふゆなので皆人つた。もちをついた。
 ×六月八日 水曜 曇後↓雨 起〓六時 寝〓八時半
 今日旧の××五日で五せつくだ。朝よりもち
 つき⁽¹⁾だ。かほをあらつ×ておまいりをした。
 かすつきを始めた。五せつくらい⁽²⁾おする人は大ぜい
 来る。前林のべつかの男の人はもちさけたん
 もの⁽³⁾等を持つて来た。とう×おちさんも来た。
 夕方近くに大はふつて来た。
 兄さんと二人で田の土の高い所よりひくい所
 に土をあこんだ。(引たわり)
 しやうぎをした。



OEI32-35

旧暦 1933年 5月 4,5日

新暦 1933年 5月 27,28日

五月二十七日 (土) 晴 起〓五時 寝〓九時
 今日旧田打⁽⁴⁾だ。外の人は家より下の
 人をたのんだ。
 僕は家に居てシャウブで屋根をふいた
 りする。夕方歸り来た。×寒い日だ。
 五月二十八日 (日) 晴 起〓七時半 寝〓九時半
 今日旧の五月五日 五節句だ。
 朝 餅つきをする。おまいり等をする。
 夕方 兄さんと二人で新場の便船で芝居
 見物に行く。人は大勢であった。
 ツジレ×ニシキ。實エイ競。慈愛の光
 等有りて大変おもしろかった。

(1) カシワ餅のことだと考えられる。(2) 五節句礼のことか。(3) 餅、酒、反物のことか。(4) 田植えを前に田を掘り起こして土を細かく砕く作業。



仁屋のカシワ餅

1988. 6.17 撮影 川島秀一



仁屋でのカシワ餅を作る様子
1988.6.17 撮影 川島秀一

屋根に挿されたヨモギとシヨウブ
1985.6.22 撮影 川島秀一
1980年代半ばに撮影された市内の茅葺民家の事例。オオイでもこのようにシヨウブとヨモギを飾ったものと考えられる。



《資料》
資料①では、桃の節句と同じく、「三節句礼」男」とだけ記されている。
仁屋の事例（資料④）は、次の通りである。旧暦の四月二八日から五月五日までは、鯉のぼりをあげる。ヨモギとシヨウブを門口、裏口、イノヒ（戌亥の方角）の門口などに挿す。この三ヶ所に三つずつ、あるいはこの三ヶ所を含めた五ヶ所に五つずつ挿す。四日の晩はシヨウブ湯に入り、布団の下にもシヨウブを敷いて寝て、翌日に納める。また、シヨウブを頭に巻き、シヨウブ酒を飲む。
また、一九八〇年代の半ばに撮影された茅葺民家の端午の節句の様子もみられる。この写真によると文中の「シャウブで屋根をふいた」という表現の実際の様子がよくわかる。シヨウブは屋根の軒の部分にほぼ等間隔に突き刺さっている。しかも、写真によるとシヨ



仁屋の屋根に挿されたヨモギとシヨウブ
1988.6.17 撮影 川島秀一
複数の場所にヨモギとシヨウブが挿されているのが確認できる。

《日記解題》
五月の節句は三二年と三三年の両年に渡って記されている。両者で共通の行事が記されているが、三二年の方がやや詳細な記述となっている。
端午の節句の前日には、毎年、シヨウブによる屋根葺きの作業が行われる。三二年には、家族の全員が菖蒲湯に入ったことも記されている。
気になるのは「ヨモギをかった」と言う表現である。「刈った」のか「買った」のかは前後の文脈では判然としないが、おそらく前者だろう。翌日の五日の日には、両年でお参りをする」と記されている。ただし、どこにお参りが行われたのか明確ではない。
この端午の節句にも、餅つきが行われた。いわゆるカシワ餅のことである。
三二年の日誌には、祝いの人々が多く訪れたとされるされており、祝いの品を持参した人もいた。また、三三年には、便船に乗って芝居見物に行ったとも記されている。船での移動ということは、おそらく対岸の市街地での公演を見たものと考えられる。もつとも公演は、節句の日というよりは日曜日であったことが大きな要因かもしれない。

ウブだけでなく、ヨモギも同時に屋根に突き刺している。カシワ餅については、仁屋の様子を写真から知ることができる。写真を見る限り、カシワ餅には白餅と草餅の二種がある。草餅の方にはヨモギを入れていたようである。

《聞き取り》

オオイでも震災前まで、シヨウブとヨモギを供えていた。ヨモギは、裏の田の土手などに生えていたので、それらを摘んで利用していた。また。カシワ餅に用いるカシワの葉

は、明神様の林の裾に生えていたカシワの木からとっていた。忠行氏が存命だった頃でも、すでにかなり高いところに枝を張っていたため、剪定バサミを用いて葉を取っていた。

その後、人手がなくなったため、シヨウブとヨモギを屋根に挿すことができなくなった。そのため震災前の数年間は、屋根の下縁側にかつての本数と同じだけ、シヨウブとヨモギをおいていたという。

ヨモギは近くで取れたが、シヨウブは奥さんが町で買ってきた。供える場所が多いため、シヨウブをたくさん購入する必要があった。

また、オオイでも、シヨウブ湯に入り、枕の下にシヨウブを敷いて眠ることは行われていた。しかし、頭にシヨウブを巻いたり、シヨウブ酒を飲むといった慣行は行われなかったようである。

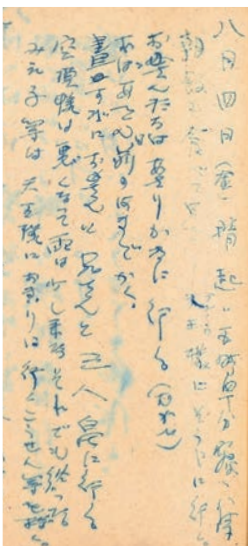


シヨウブを頭に巻き、シヨウブ酒を飲む
1985. 撮影 川島秀一

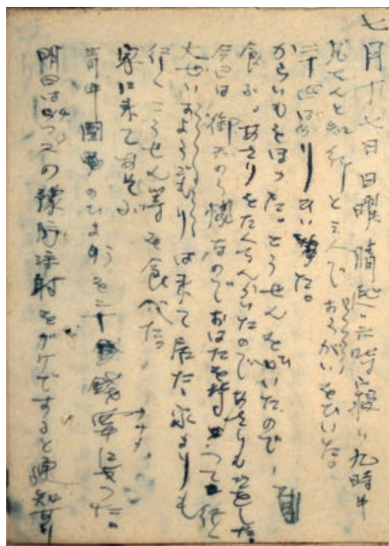


シヨウブ酒
1985. 撮影、川島秀一

● 天王様



OEI33-48
旧暦 1933年 6月 13日
新暦 1933年 8月 4日



OEI32-50
旧暦 1932年 6月 14日
新暦 1932年 7月 17日

七月十七日 日曜 晴 起 六時 寝 九時半

兄さんと知行と三人でおうがい⁽¹⁾をひいた
二十匹ばかりをひいた。

からいも⁽²⁾をほった。こうせん⁽³⁾をひいたので
食ふ。あさりをたくさんかいたのであさりむきをした
今日は御天のう様なのでおはたを持×つて行く。

大ぜいおようごもりは来て居た。家よりも
行く。こうせん等を食べた。

家に来てあそぶ。

青年團×のひよ×うを二十×錢要にやつた。

明日はチフスの豫防注射をガケですと通知あり。

八月四日(金) 晴 起 五時四十分 寝 八時

朝飯を食べて兄さんと天王様にそうじに行く。

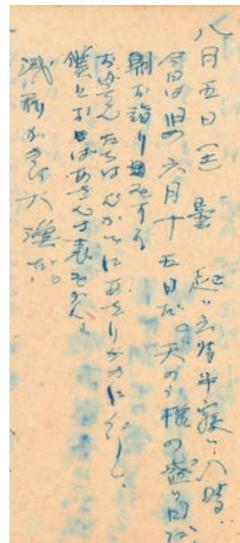
お母さんたちはあさりかきに行く。(むかひ)

おばあさんは前のはまでかく。

晝×すぎにお母さんと兄さんと三人畠に行く。

空模様は悪くなって雨は少し来た。それでも終った。

みえ子等は天王様におまいりに行くこうせん等を頂く。



OEI33-48

旧暦 1933年 6月 14日

新暦 1933年 8月 5日

八月五日(土) 曇 起 六時半 寝 八時
 今日(4)は旧の六月十五日だ。天のう様の盛り日だ。
 朝お詣りをする。
 お母さんたちはむかひにあきりかきに行く。
 僕とおばあさんは表をかく。
 浅利かきは大漁だ。

(1)おうがいウグイの降海型をさす。(2)カライモ 気仙沼でジャガイモ
 のことをさす。(3)はったい粉のこと。(4)暦では、この日は旧暦の六月の
 一四日になるが、日記では一五日となっている。

《日記解題》

三三年の日記によれば、六月一四日から天王様の掃除が行われている。家族のなかには、この日にお参りに行く者もいた。栄一氏は一五日の朝早くにお参りに行っている。

三二年の記述では、「御天のう様なのでおはたを持って行く」とある。当時はこの小祠にも、祭日にはハタを立てていたことがわかる。さらに天王様には、「おようごもり」が大勢来ていたと記されている。小々汐の多くの家からお参りがあったようである。この日はコウセンをいただく日であったことも確認できる。

《資料》

資料②には、一四日の晩、キュウリを天王様に備えて夜籠りをする。一五日は「河童」さまといって、海にキュウリを流す。この日の前にはキュウリは食べないものと記されている。日記中の「おようごもり」とは、この「夜籠り」にあたるものだろう。なお、日記のなかには、金比羅様にも「おようごもり」という表現があり、縁日や願掛けに際して、夜に神様の所に籠もる慣行があったことがわかる。

資料④では、次のように記されている。タクバにある天

王様へ参詣に行くとき、キュウリを持っていき、途中で海に向かって「これは河童さまに上げす」と言っ海に納めた。そのキュウリは拾って食べるものではないといわれた。前日の一四日の晩には、「春コウセン」と呼んで、コウセン(はったい粉)を食べた。

《聞き取り》

オオイでは、キュウリを作るとは禁じられていた。昔、オオイの先祖に病人が出たとき、これからキュウリを作らないので治してほしいと願をかけた。そのため、自分の畑



上 かつての天王様の様子

1986.6 撮影 川島秀一

下 天王様に詣る尾形民子、健浩さん

2011.8.15 撮影 葉山茂

震災の年のお盆。本来、盆に天王様に参ることはないはずだが、この年はここにも足を運んだ。

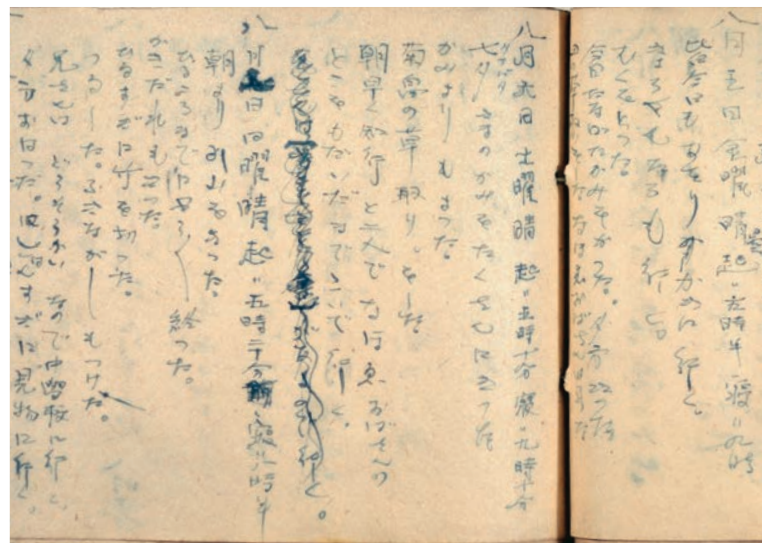


共同墓地からみた天王様とタクバの様子

2013.12.30 撮影 川村清志

天王様の周辺の林の木は、半ば切り倒されている。残りの杉の木もものに全て切り倒された。奥のタクバの周辺も今では、道路建設のために埋め立てられている。

七夕



OEI32-054
旧暦 1932年 7月 4,5,6日
新暦 1932年 8月 5,6,7日

八月五日 金曜晴曇起 五時半寝 九時
皆今日もあさりをかきに行く。

きよちゃんたちも行く。

むくをとった。

今日たなばたかみをかかった。夕方きつた。

田の草取りをした。なおゑおばさんは来た。

八月六日 土曜晴起 五時十分寝 九時十分

七夕さまのかみをたくさんにきつた

かみよりもよつた。

菊畠の草取りをした。

朝早く知行と二人でなほゑおばさんの

ところをもだいだまでこいで行く。

八月七日 日曜晴起 五時二十分×寝八時半

朝よりかみをきつた。

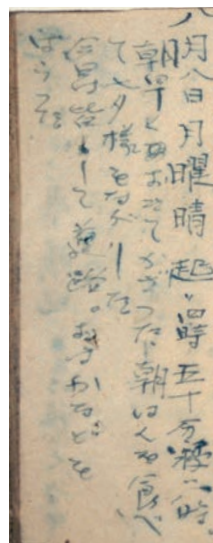
ひるころまでやうく終った。

かきだれもきつた。

ひるすぎに竹を切った。

つるした。ふさながしもつけた。

兄さんは、どうそうかいなので中學校に行く。



OEI32-054
旧暦 1932年 7月 7日
新暦 1932年 8月 8日

夕方おはつだ。四じはんすぎに見物に行く。

八月八日 月曜晴起 四時五十分寝 八時

朝早くおきてかざった。朝はんを食べ

て七夕様をながした。

今日は皆して道路。おはかななどを

はらった。

《日記解題》

たなばた

七夕は旧暦の七月四日から準備が始まっている。この日に、七夕のための紙を購入し、それを切ったと記している。翌日の五日には、さらに紙を切ったうえで、「かみより」をよつた。これは紙を七夕の竹と結わえるためのものだろう。六日になっても紙を切る作業は続き、その日の昼ごろにようやく完了したようである。また、作業の一環で、カキダレも製作している。午後になると七夕用の竹を切っている。おそらく、家の裏手の山に自生している竹を用いたものと考えられる。切ってきた竹を家に吊るし、フサナガ

しも付けている。

この翌日、七夕様と呼ばれるこの竹飾りは、朝食後に流したとされる。これは後述する仁屋の記述から、小々汐の海に流したのと考えられる。また、この日には、地区の道路と墓地の清掃があったことも記されている。

《資料》

いずれの資料にも、オオイについて、七夕の行事についての報告はない。以下では、まず小々汐の事例として紹介されている資料②をみていく。

タナバタ 六日。男の子供たちがそれぞれ二〜三人ずつの仲間組で、小遣いを出し合って紙を買い、笹竹を伐って短冊を飾ったタナバタを作って家の庭先に立て、机の上に果物・キュウリを供える。子どもたちはオカミで、白いご飯とカライモ（馬鈴薯^{ばれいしょ}）汁のご馳走を食べる。タナバタは翌日、海辺に立てる。

ナノカビ 七日をナノカビという。墓払い・井戸替えを



仁屋の七夕の竹飾り

1989.7.6 撮影 川島秀一

おそらく、材質は異なるものの、日記と同じように七夕紙、フサナガシ、カキダレなどが竹に飾られている。

する日である。

次に資料④から仁屋についての記述を紹介する。

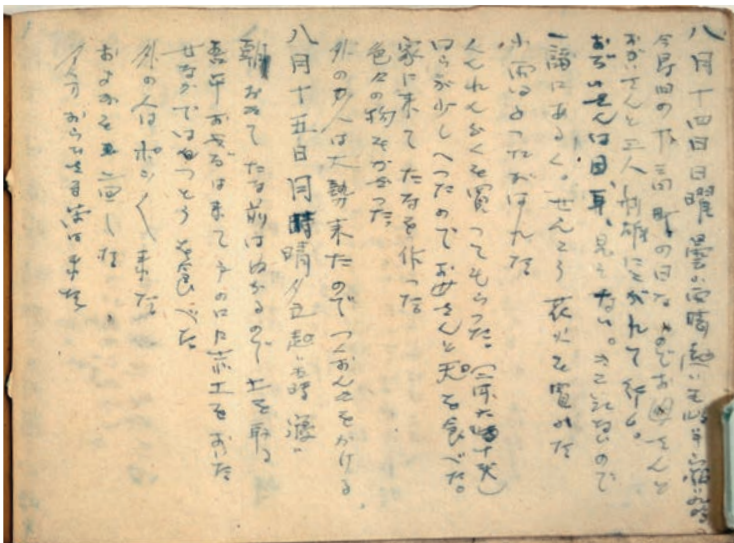
ナノカビ 八月七日（以前は旧暦の七月七日）は、ナノカビ。この日、井戸替え（井戸掃除）をすると井戸に良い水が湧くといわれた。「七夕様に貸す」といって、この日、家の衣装を干すと「衣装持ち」になるといわれた。

七夕は天幕を張って、子どもたちに神様に供えさせた。七夕の竹には、習字をした紙や裁縫^{さいほう}をしたものを吊すと習字や裁縫の技能が上がるともいわれた。七夕の竹は、ウラ（先端）の方を残しておき、枝を三つか五つつけたものを海にたたりする。モト（根元）は、畑に刺して虫除けの呪いとした。「これらのことを七夕様を送る」と言う。

《聞き取り》

現当主夫妻の記憶の限りでは、オオイで七夕に関する特別な行事は行われていなかった。よって七夕の行事も戦時中か、戦後の早い時期に休止されたものと考えられる。

お盆



OEI32-056

旧暦 1932年 7月 13,14日

新暦 1932年 8月 14,15日

八月一四日 日曜 曇り小雨 晴 起五時半 寝 九時

今日は旧の十三日町の日なのでお母さんと

おぢいさんと三人利雄にこがれて行く。

おぢいさんは目、耳、見えない。きこえないので

一緒にあるく。せんこう花火⁽¹⁾を買った。

小雨はふつたがはれた。

くんれんふくを買ってもらった（二円六×十銭）

はらが少しへったのでお母さんと天を食べた。

家に来てたな⁽²⁾を作った。

色々な物をかざった。

外の×人は大勢来たのでつくおんき⁽³⁾をかける。

八月十五日 月曜 晴夕立 起 五時 寝 〃

朝起きてたな前はぬかるので土を取る

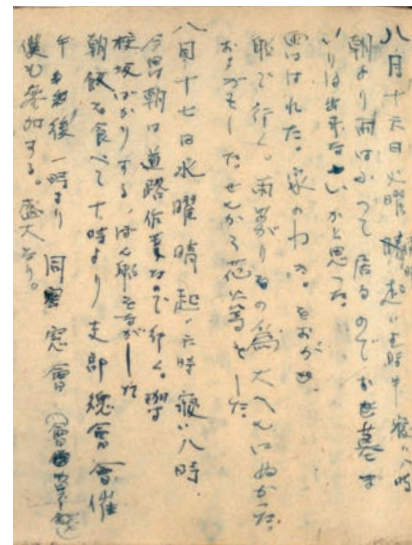
吾平おやぢは来て戸の口に赤土をおいた

せなかではつとう⁽⁴⁾を食べた。

外の人はボツく⁽⁵⁾来た。

およぎを二回した

夕方おらひさま⁽⁵⁾雨は来た。



OEI32-056

旧暦 1932年 7月 15,16日

新暦 1932年 8月 16,17日



仁屋で作られたセナカデバットウ

1985.8.16 撮影 川島秀一

同じものをオオイでも、一五日に食べる

八月十六日火曜 雨晴起 五時半寝 八時
朝より雨はふつて居るのでお墓ま
いりは出来ないかと思つた。
雨ははれた。家のわきをおがむ。
船で行く。雨あがりの爲大へんぬかった。
およぎをした。せんかう花火等⁽⁴⁾をした。

八月十七日水曜 晴起 六時寝 八時
今日は朝は道路作業なので行く。學
校坂ばかりする。ぼん船⁽⁵⁾をながした。
朝飯をたべて十時より支部總會會催
午後一時より 同窓會(會費十錢)
僕も参加する。盛大なり。

(1)購入された線香花火は、一六日に用いられているため、儀礼的な意味
があると考えられる。(2)盆棚のこと。(3)「つくおんき」は蓄音機をさす。
来客のための娯楽として利用されていたようである。(4)セナカデとい
う道具の形に似せたハットウ(スイトン)のこと。(5)盆舟のこと。この頃
は海に流していたようである。(5)おらひさまは、お雷様で雷のこと。

《日記解題》

盆についての記述は、三三年の日記にしか記されていない。三三年は、九月二日(旧暦七月十三日)に「此の間、忙しいので(日記を)つけません」と記され、一週間ほどの空白がある。この前年に栄一氏にとつての祖父、貞七氏が逝去されており、この年が初盆であった。そのため様々な行事が行われていたことが推測される。その時期の営みが日誌に記されていたなら、非常に貴重な記録となっていただろう。

さて、一九三二年の日誌では、お盆については、八月四日、旧暦の七月十三日(以下、旧暦での表記)から始まる。一日は「町の日」とされ、栄一氏とその母、さらに祖父も市内に買い物に出ている。買い物は、「せんかう花火」しか書かれていないが、それ以外に盆で入り用な品々を購入したと考えられる。

家に帰ると「たな」を作った」とある。これは、ナカマに作る盆棚のことである。棚に飾った「いろいろなもの」については、聞き取りと参与観察による資料を後で紹介する。

一四日になると、「せなかではつとう」を食べたと記されている。これは形が特異なハットウ(スイトン)で、震

災前までオオイでも作られていた。

一五日になると天候が悪いなかで、墓参りが行われた。「船で行く」とあるので、これは小々汐の共同墓地のことである。共同墓地は、オオイのある小々汐の谷から南に丘を一つ越えて、さらに小さな谷を挟んだ丘の上に位置する。その丘越えの道が雨でぬかるんでいたため、海沿いに船で移動したということだろう。それでも、共同墓地がある丘までの道は、「大へんぬかった」ようである。この夜には「せんかう花火等」をしたと記されているが、これは単なる娯楽ではないかもしれない。この点については後述の仁屋の事例が参考になる。

一六日は、ただ「ぼん船をながした」という記述のみが、盆に関連する行事である。この簡潔な記述からは、しかし、オオイでも盆舟を海に流していたことが確認できる。これは、後述の現在の行事次第とは異なる。

《資料》

資料①では、次のように記されている。

七月十三日 盆 オミヤゲの贈答あり。女連。夜、男連
中が仏おがみに参集。

七月一四日 男の盆礼



国立歴史民俗博物館のオオイの盆棚展示
2014.7.31 撮影 川村清志



オオイの盆棚
2010.8.15 撮影 松田睦彦



盆に用いる品の販売
1988.8
撮影 川島秀一
町の日には、気仙沼の山あいの集落から、主婦たちが、盆に使う品物を売りにくる。

七月一六日 男、仏送りに参集。
いずれも旧暦で記されており、戦後も一九五〇年代までは、月遅れではなく旧暦で行事が行われていた可能性がある。
次に資料④から仁屋の盆行事を紹介する。
オオイと重なる行事も多いが、行事の日時や内容に微細な違いもある。それらの差異についても今後検討するために、関連する行事を以下に掲載する。
盆棚 八月一三日に盆棚を作ること「盆棚をかく」と言う。棚の上から先祖の位牌・



仁屋の盆棚
1990.8.15 撮影 川島秀一

団子、アワ米・果物・花の順番で上げる。「アワ米」とは、米、玄米・オダナマンジュウ・アケビ、ハツカケシバミなどを総称して言う。盆棚の後ろ側には、「無縁様」も祀る。盆棚を作ったら魚を食べる。
八月一五日は、お赤飯を食べ、一六日には「セナカデバツトウ」を食べる。この日、盆に帰ってきたオホトケが荷物を背負って戻っていくといわれ、セナカデ（背中あて）という運搬具に似た带状のハツトウ（はったい粉を練ったものを汁にいたれた食べ物、スイトンのこと）を作って食べる。盆中に魚を食べる日は、一三日に盆棚をかいたとき、

一四日の昼、一五日の墓参りから帰ってきたときだけである。一七日からは、魚を通常通りに食べた。

盆船 船はカヤで作る。柳の枝で作る盆箸は、盆舟の帆柱に用いた。盆舟には盆棚に上げたものを乗せて、流した。

墓参り 墓参りに行くのは八月一五日で、お墓に上げた物にカラスが付かないと秋時化になるといわれるので、「カラスさ 食（か）せす」と語ったり、「カラス！カラス！」と呼んだりする。このことを「オミサキを付ける」といった。

盆火とラツツオク 「盆火は、八月一三〜一六日まで毎晩燃やした。オガミの盆棚の前では、下に灰皿を置いて線香花火をした。ラツツオクは、八月一五日・二〇日の廿日盆、三〇日の晦日盆に燃やす。ラツツオクを燃やしたら、家の周りを祓い、その後、戸の口（玄関）に持つてきて、足を火に近づけながら、「へーび、ムカデに喰われぬように」と唱える。

《聞き取り》

震災前のオオイの行事と日記の記述には、実施する期間にずれがある。日記の時期は、旧暦の七月一三日から一六日にかけて行われている。それに対して、震災前のオオイでは、日本の他の多くの地域と同様に月遅れの八月一三日



右上 ハスで供え物を包む当主の奥さん

右下 盆舟

上 ホトケ様を送る

2010.8.16 撮影 松田睦彦

供え物はハスの葉にくるんでマコモで作られた盆舟にのせる。盆舟の帆にはカワヤナギの枝を用いる。



博物館の盆棚にお参りする
尾形家の親族

2013.7.31

撮影 川村清志

歴博の尾形家の再現展示では、各々の季節に合わせて、正月と盆の展示を行なっている。写真は、盆棚の展示に合わせて尾形家が来館された時の様子である。



右 盆棚の裏側のお供え

2010.8.15

撮影 小池淳一

手前にあるのはミソハギ

左 オオイのセナカデバットウとのっぺい汁とキュウリ

2010.8.15

撮影 小池淳一



から一六日にかけて盆行事が行われる。これは、完全に新暦の暦に移行した正月の行事とも、旧暦を守るエビス講や端午の節句とも異なる季節の選択の仕方である。

盆の支度 盆の買い物は一二、三日に行う。この両日、港近くの交差点に盆マチが出る。これは近隣の農家の主婦たちが、盆に用いるさまざまな道具や供物を買うもので、今ではスーパーなどでも購入できるが、根強い人気がある。売られる品は、盆舟(マコモ、五百円)、帆柱(ヤナギ、百円)、お棚もの(「山のもの」ともいう。アケビ、クリ、ヤマナシハシバミなど。二百円)、お棚饅頭(小麦を原料とし、食紅などで五色に色をつけたもの。二百円)、カキダレ(盆棚の柱に飾りつける色紙。二百円)、コンブ(同前。二百円)、ラツツォク(一三、一六、三〇日の晩に燃やす。麻殻の端に硫黄を塗ったもの。三把で二百円)、竹筒(墓での花立て。五百円)、花(三百円)などである。全て、山間の農家が畠や家の周りで調達して作ったものである。盆マチに店を出す人は年々少なくなってきた

おり、今年は三人だけであった。一二日は九時から七時頃まで、一三日は午前中で、安くしてでも売り切り、荷物をなくして帰る。

盆棚 盆棚を作ることを「盆棚をかく」という。仏壇のあるオカミではなく、庭に面した神棚のあるナカマで庭に向けて作る。仏壇から位牌を全て移し、掛軸を下げ、飾りつける。盆棚の前に机を置き、ウチシキを敷いて、供物や線香立て、ロウソクを立てを置く。

盆棚は高さ一八八〇ミリ、幅一五〇〇ミリ、奥行き九一〇ミリ程度で、奥行きの異なる上下二段からなる。上段に位牌、団子、落雁、お膳などを置き、二段目には盆舟、茶碗に水を汲み、ミソハギの花の枝を添えて置く。

盆棚の奥の壁に十三仏の掛軸を下げ、前面に莫摩を垂らして、掛軸や観音や祖師の軸を下げる。痛んで吊るせなくなったものも多くある。

盆のお膳は、上段と二番目、さらに空になった仏壇にも供える。盆棚をかけた後は「お精進」といい、魚や肉などは食べない。

迎え火 一三日に屋敷の墓で稲の藁束を十束



上 被災後のシンヤイリでの墓参り

右 被災後の家の脇での墓参り

2011.8.14 撮影 葉山茂

震災の年は、まだ周囲にさまざまな被災物が残るなかで、盆の行事が行われている。

上のシンヤイリの古い墓は、現在では、架橋道路の工事のために埋め立てられた。



上 家の脇での墓参り

2010.8.15 撮影 松田睦彦

左 家の脇で盆舟を燃やす

2010.8.16 撮影 松田睦彦

日記にあるようにかつてはオオイでも、盆舟を海に流していた。現在では、16日に家の脇の墓地に持っていき、燃やしている。



べる。このハットウで先祖様が供物を背負ってあの世に持って帰るのだという。小麦粉を練って、翌朝に平たく伸ばして、九〇ミリ×二五ミリくらいに切って茹で上げ、きな粉と砂糖をまぶす。これとのつべい汁(豆腐、コンニャク、油揚げ、麩、椎茸、茄子、ササギ、ジャガイモ、サツマイモ、ニンジン)を小さく切って葛をかけて、とろみをつけるを食べる。

奥さんの民子さんによると、セナカデバットウは、まず、茹でる前に適当な大きさに切ったところで、一度、盆棚にお供えする。それから茹でたきな粉をかけたものができると、そちらもお供えすることになっていた。

墓参りは三ヶ所をまわる。まず小々汐を含めた四ヶ浜地区の共同墓地、次に小々汐の沢沿い(シンヤイリと呼ばれる)にある古い墓、最後に屋敷地近くにある古い墓の順番に回る。団子や野菜、米などを切って混ぜたオソナエモノと甘酒、水、花、線香を持っていく。オソナエモノと甘酒は器などに入れるのではなく、直接、墓石とその前に注ぎかける。三ヶ所全部を回る

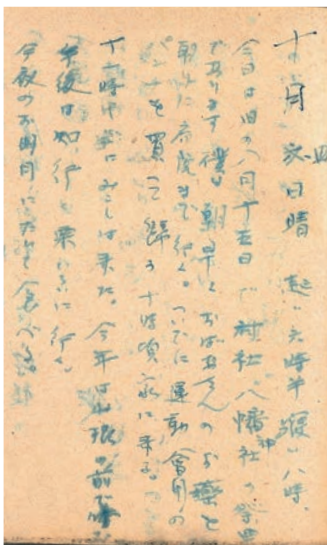
ほど燃やすことを「迎え火」といった。以前は海に火をつけた藁束を流したという。かつては麦藁であった。田を作らなくなつてからやめてしまった。

また一三日の夜に家の庭でラツツオクを燃やす。一本づつ等間隔で火をつけた方を家屋に向けておく。さらに家から門に向けて一本づつ置く。これを「仏さんの足元を照らす」という。消えても気にしない。すぐに集めて、一箇所で完全に燃やす。「蛇・百足にか(喰)れないように」と言いながら、足などにかざす。

盆礼ほか 一四日は午前中に(朝八時過ぎから)小々汐集落の家々の人が盆礼に来る。当主は盆棚の前で迎え、「盆前の頃はいろいろとお世話になり、ありがとうございます。只今もありがとうございます。」と挨拶する。一五日は午前中に墓参りをし、花や水の他に甘酒や団子を墓石一つ一つに供える。午後は親戚筋の家々を当主が回る(現在では母方の親戚、従兄弟を中心に一三軒)。

一五日の朝にはセナカデバットウを作って食

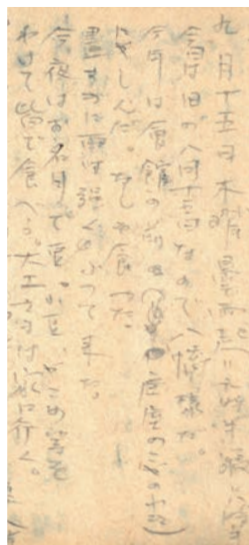
● お名月（八幡様の祭礼）



OEI33-56

旧暦 1933年 8月 15日

新暦 1933年 10月 4日



OEI32-62

旧暦 1932年 8月 15日

新暦 1933年 9月 15日

上 共同墓地への参拝の様子

2011.8.16

撮影 葉山 茂

下右 ラッツォク

下左 ラッツォクの火を足に
当てる

2009.8.16

撮影 川島秀一

ラッツォクの火に足を
あてると虫に咬まされ
ないとされた。

のは一時間半ほどかかる。シンヤイリの墓は小々汐集落全体の古墓のようであり、それに参るのはオオイとしての役目らしい。午後にはガーゼタオルや風呂敷と御仏前（二千円）とを持って、親戚を回る。

一六日には、かつてはアンコモチを作って食べた。この日は朝のうちに盆棚を片付け、位牌を仏壇に戻して、盆舟を仕立てる。盆の間の供物を蓮の葉に包み、かつては海に流したが、今では墓地で燃やしてしまう。夕方にラッツォクを燃やす。三十日はミソカ盆といい、再びラッツォクを燃やすという。



震災後の住居でラッツォクを燃やす

2012.8.16 撮影 葉山 茂

震災後に移り住んだ町での生活でも、盆にラッツォクを燃やす行事は続けられていた。

九月十五日 木曜 曇雨 起 六時半 寝 八時半
今日は旧の八月十五日なので八幡様⁽¹⁾だ。
今年は會館の前（××任屋のこやのわき）
にやしんだ。なしを食った。
晝すぎに雨は強くふって来た。
今夜はお名月で豆、小豆、やこめ⁽²⁾等を
わけて皆で食べる。大工さまは家に行く。

十月×四日 晴 起 六時半 寝 八時半
今日は旧の八月十五日で村社八幡神社の祭典
であります。僕は朝早くおばあさんのお薬を
取りに病院まで行く。ついでに運動會用の
パンチを買って歸る。十時頃家に来る。
十一時にみこしは来た。今年は山根の前で休む
午後は知行と栗ひろいに行く。
今夜のお明月にたいて食べる。

(1)鹿折八幡神社のこと。小々汐からは、約四キロほど北に位置する。日記にあるように小々汐を含めた鹿折村の村社であった。(2)やこめは焼米のこと。



仁屋のお名月の飾り
1992.9.30 撮影 川島秀一



震災後のオオイのお名月の飾り
2013.9.19 撮影 尾形健浩



小々汐での八幡様のオサガリ
1984.9.15 撮影 川島秀一



鶴ヶ浦で船に載せられる神輿
1984.9.15
撮影 川島秀一



小々汐でのオサガリ
1986.9.15
撮影 川島秀一

《日記解題》

旧暦の八月一五日は二年間にわたり、二つの行事が記されている。一つは「村社八幡神社の祭典」であり、もう一つは、「お名月」である。

まず、八幡神社の祭典では、二年目の記述にあるように神輿の到来が大きなイベントであったことがわかる。三二年の「会館の前」、三三年の「山根の前」は、いずれもその休憩場所をさしている。具体的にどのような内容であったのかは日記からは分からない。ただ村社という規模から、後の写真の様子からもこれが小々汐全体に関わる行事であったことは間違いない。

二番目の「お名月」の行事はオオイという家単位で行われたものと考えられる。三二年の記述では、「豆、小豆、やこめ等をわけて皆で食べる」と記されている。この「やこめ」は焼米のことであり、資料④の報告と符合する。

《資料》

八幡神社の祭礼については、小々汐を超えた地域の行事のため、あまり詳しい記載はない。八幡様の神輿の渡御は、オサガリと呼ばれ、氏子域全体を移動するものであり、小々汐を含めた四ヶ浜も含まれる。資料②では、「小々汐では、

オオイがその休憩所にあてられて一行の接待をしたという」と記されているが、必ずしも、オオイ（オオイ）だけが、休憩所ではなかったことが、日記からは確認できる。お名月については、資料④が、次のようにまとめている。

白を起こして箕をのせ、その上にサツマイモ、ゆで豆、栗やナシなどの果物を盛り、ススキやハギ、ロウソクを供える。かつてはこの日に欠かせない供物が、もう一つあった。水口などの青田から刈って作ったヤゴメ（焼き米）である。この供物を頂く者を別当様と呼び、必ずその家の当主がその役を務め、女の人は食べるものではないといわれている。

《聞き取り》

名月 現当主の奥さんが来た頃も、ススキなどはさしていたが、白などを出して行うことはなかったようである。この行事も、すでに簡略化されていた。それでも十五夜には、現在でも、ススキとハギをいけて、果物などをお供えしている。

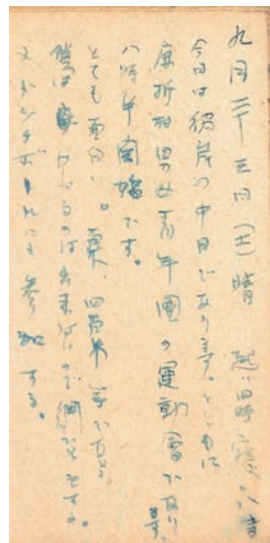
オサガリ 現在、八幡様の祭りは、月遅れの九月一五日に近い日曜日に行われる。震災後の二〇一五年からは、小々汐で新しく造成された集会所が休憩所になった。

● 彼岸の中目



OEI32-63

旧暦 1932年 8月 23日
新暦 1933年 9月 23日



OEI33-56

旧暦 1932年 8月 4日
新暦 1933年 9月 23日

九月二十三日 金曜 起 六時五十分 寝 八時
朝おきて見ると雨はふつて居た。
今日は旧の××ひがんの中日だ。
運動會はやらないと思った。お母さんはあ×とは行く。雨ははれた。運動會を始××める。
といふので、知行、みえ子、兄さん。等は行く。

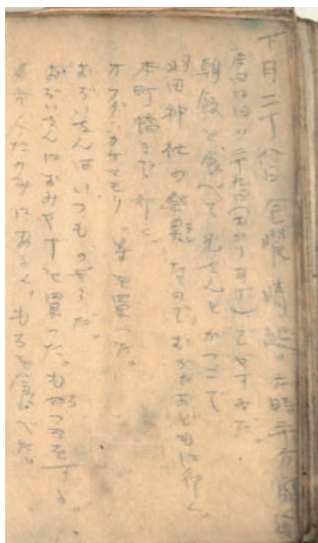
九月二十三日(土) 晴 起 四時 寝 八時
今日は彼岸の中日であります。とともに
鹿折村男女青年團の運動會であります。
八時半開始です。
とても面白い。百米。四百米等である。
僕は×はねるのは出来ないで綱ひきをする。
又ドッチボールにも参加する。

の日でもあった。なお聞き取りでは、この日は、墓参り以外に、とりたてて行事は行われていなかったと記憶されている。

《日記解題》
二ヶ年にわたり「彼岸の中目」が記録されている。「旧」と記されているが、二年ともに新暦の九月二三日が中日になっている点が注目される。この日は地区青年團の運動会

● お刈り上げ

(羽田神社の祭礼)



OEI32-70

旧暦 1932年 9月 29日
新暦 1933年 10月 28日

《日記解題》
お刈り上げは、後でみるように収穫を祝う日であったが、日記からは特別な行事は確認できない。しかし、この日に餅つきをして食べたというのは、このお刈り上げの行事食と捉えることもできる。この日は、また、「羽田神社の祭典」であると記されている。

十月二十八日 金曜 晴 起 六時二十分 寝 八時
今日は旧の二十九日(おかりあげ)でやすみだ。
羽田神社の祭典なのでむかひおども⁽¹⁾に行く。
本町橋⁽²⁾まで行く。

オフダ、カケマモリ、⁽³⁾等を買った。

おぢいさんはいつものやうだ。

おぢいさんにおみやげを買った。もちつきをする。
夕方、人たのみにあるく。

もちを食べた。

(1)「迎えお供」のことか。(2)市街地の化粧坂から元田中に向かう途中の大川にかかる橋だと考えられる。(3)札や掛け守りは、神輿に随行する人たちが購入することができた。

栄一氏は、「むかひおどもに行く」と記している。「本町橋」まで行ったとあるが、どのようなルートで移動したのかはわからない。しかし、「むかひおども」という表現からも、どこかの御旅所まで出向いて、神輿を迎え、一定の距離をお供して歩いたのではないだろうか。

神輿の巡行
2016.10.29
撮影 萱岡雅光



五十鈴神社での浜下り
1990.11.8
撮影 川島秀一
震災前の五十鈴神社での神事の様子。



が引き合いに出されることがある。尾形家は三人兄弟で気仙沼にやってきたと伝えられている。そのうち、一人は山間部の八瀬に住みつき、もう一人も同じく羽田に行き、羽田神社の宮司家として定着した。そして小々汐には、オオイの祖が定着した。三つの家は現在では特に行き来してはいない。しかし、かつては羽田神社の御輿は「小々汐のオオイがお迎えに行かないと出られない」と言われており、実際に御輿を迎えに小々汐の尾形家の前当主が気仙沼の市街まで出かけることがあった。

しかし、現当主の健氏が、羽田神社の人に由来を話したときには、羽田の家では、オオイとのつながりは伝えられていなかったという。日記の記録は、伝承そのものを裏づけるものではないが、祭礼において独特の役割があったことを示している。



五十鈴神社での神輿の巡行
2014.10.22 撮影 萱岡雅光
内湾地区の五十鈴神社の周辺でさえ、震災から2年半がたっても復旧は進んでいない。

《資料》

お刈り上げについては、資料③で、気仙沼での概略的な記述が行われている。それによると「旧暦九月に三度ある九の日をミクンチ（三九日）と言って刈り上げ祝いをするが、最後の二九日か、末日（三〇日）、又は朔日（一〇月一日）に祝う風習になっている」とされる。主に餅やぼた餅を食べることが多かった。地域によっては、白を伏せてその上に箕をのせ、灯明を点けて、餅や菊の花を供えることも行われていたようである。

羽田神社は、気仙沼の市街から南西部に約八キロほど離れた赤岩地区上羽田に位置する。この旧暦の九月二十九日の祭礼では、市街地に向けて神輿の渡御が行われる。その際には市内の五十鈴神社、北野神社も経由する。

資料②には、「祭礼には尾形本家が招待されるならわしであるが、この神社は本吉地方二〇カ村の鎮守として祀られているもので、氏子の範囲はかなり広範である」と記されている。この記述は、聞き取りにおける尾形家の始祖伝説とも関連性をもっている。

《聞き取り》

尾形家と羽田神社の関係については、尾形家の始祖伝説

表④ 尾形栄一日記資料一覧

1932(昭和7)年度日記(OEI32-)				1933(昭和8)年度日記(OEI33-)			
番号	記載日	番号	記載日	番号	記載日	番号	記載日
0	表紙	46	7.1- 7.4	0	表紙	46	7.22- 7.26
1	1.1- 1.6	47	7.5- 7.9	1	1.1- 1.3	47	7.27- 7.31
2	1.7- 1.10	48	7.10- 7.13	2	1.4- 1.8	48	8.1- 8.6
3	1.11- 1.14	49	7.14- 7.17	3	1.9- 1.12	49	8.7- 8.9
4	1.15- 1.18	50	7.18- 7.21	4	1.13- 1.17	50	8.10- 8.14
5	1.19- 1.22	51	7.22- 7.25	5	1.18- 1.22	51	8.15- 8.18
6	1.23- 1.26	52	7.26- 7.29	6	1.23- 1.26	52	8.19- 8.24
7	1.27- 2. 2	53	7.30- 8. 2	7	1.27- 1.30	53	8.25- 8.30
8	1.31- 2. 3	54	8.3- 8.8	8	1.31- 2. 3	54	8.31- 9.2, 9.9
9	2. 4- 2. 7	55	8.9- 8.13	9	2.4- 2.7	55	記載なし
10	2. 8- 2.11	56	8.14- 8.18	10	2.8- 2.12	56	9.23, 10.2-10.6
11	2.12- 2.15	57	8.19- 8.21	11	2.13- 2.14	57	10.7- 10.11
12	2.16- 2.19	58	8.22- 8.27	12	2.15- 2.19	58	10.12- 10.15
13	2.20- 2.22	59	8.28- 9.1	13	2.20- 2.25	59	10.16- 10.20
14	2.23- 2.26	60	9.2- 9.6	14	2.26- 3.1	60	10.21- 10.26
15	2.27- 3. 1	61	9.7- 9.13	15	3.3	61	10.27- 11.1
16	3. 2- 3. 5	62	9.14- 9.19	16	3.3	62	11.2-11.5, 11.14
17	3. 6- 3. 8	63	9.20- 9.25	17	3.8	63	11.15-11.24
18	3. 9- 3.12	64	9.26- 10.1	18	3.9- 3.12	64	11.27-11-28, 12.1
19	3.13- 3.16	65	10.2- 10.5	19	3.13- 3.16		
20	3.17- 3.19	66	10.6- 10.10	20	3.17- 3.19		
21	3.20- 3.23	67	10.11- 10.16	21	3.20- 3.24		
22	3.24- 3.27	68	10.17- 10.21	22	3.25- 3.29		
23	3.28- 3.31	69	10.22- 10.27	23	3.30- 4.2		
24	4.1- 4.4	70	10.28- 11.1	24	4.3- 4.6		
25	4.5- 4.7	71	11.2- 11. 7	25	4.7- 4.10		
26	4.8- 4.11	72	11.8- 11.11	26	4.11- 4.14		
27	4.12- 4.15	73	11.12- 11.14	27	4.15- 4.21		
28	4.16- 4.18	74	11.15- 11.18	28	4.22- 4.26		
29	4.19- 4.21	75	11.19- 11.23	29	4.27- 4.30		
30	4.22- 4.25	76	11.24- 11.28	30	5.1- 5.6		
31	4.26- 4.27	77	11.29- 12.2	31	5.7- 5.11		
32	4.28- 4.29	78	12.3- 12.7	32	5.12- 5.15		
33	4.30- 5.2	79	12.8- 12.13	33	5.16- 5.20		
34	5.3- 5.6	80	12.14- 12.17	34	5.21- 5.25		
35	5.7- 5.10	81	12.18- 12.22	35	5.26- 5.31		
36	5.11- 5.14	82	12.23- 12.28	36	6.1- 6.5		
37	5.15- 5.19	83	12.29- 12.31	37	6.6- 6.10		
38	5.20- 5.23			38	6-23		
39	5.24- 5.29			39	6.24- 6.25		
40	5.30- 6.3			40	6.26- 6.28		
41	6.4- 6.8			41	6.29- 7.3		
42	6.9- 6.13			42	7.4- 7.7		
43	6.14- 6.18			43	7.8- 7.13		
44	6.19- 6.23			44	7.14- 7.18		
45	6.24- 6-30			45	7.19- 7.21		

編著

川村清志

国立歴史民俗博物館・准教授

葉山茂

国立歴史民俗博物館・特任助教

監修

川島秀一

東北大学災害科学国際研究所・教授

小池淳一

国立歴史民俗博物館・教授

勝田徹

国立歴史民俗博物館・博物館事業課

萱岡雅光

リアス・アーク美術館学芸員

川島秀一

川村清志

小池淳一

松田睦彦

国立歴史民俗博物館・准教授

編集協力

気仙沼市教育委員会

リアス・アーク美術館

国立民族学博物館

尾形健

尾形健浩

尾形民子

川島秀一

幡野寛治

気仙沼市教育委員会

写真

尾形健

尾形健浩

国立歴史民俗博物館の尾形家再現展示
写真は土間と囲炉裏の様子



気仙沼尾形家（大家）の年中行事
—尾形栄一日記を中心に—

編集・発行	大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館© 〒 285-8502 千葉県佐倉市城内町 117 TEL 043-486-0123（代表）
印刷・製本	株式会社弘文社 2017 年 3 月 30 日